



國名所圖會

後編

卷之六



紀伊名所圖會後編卷之三

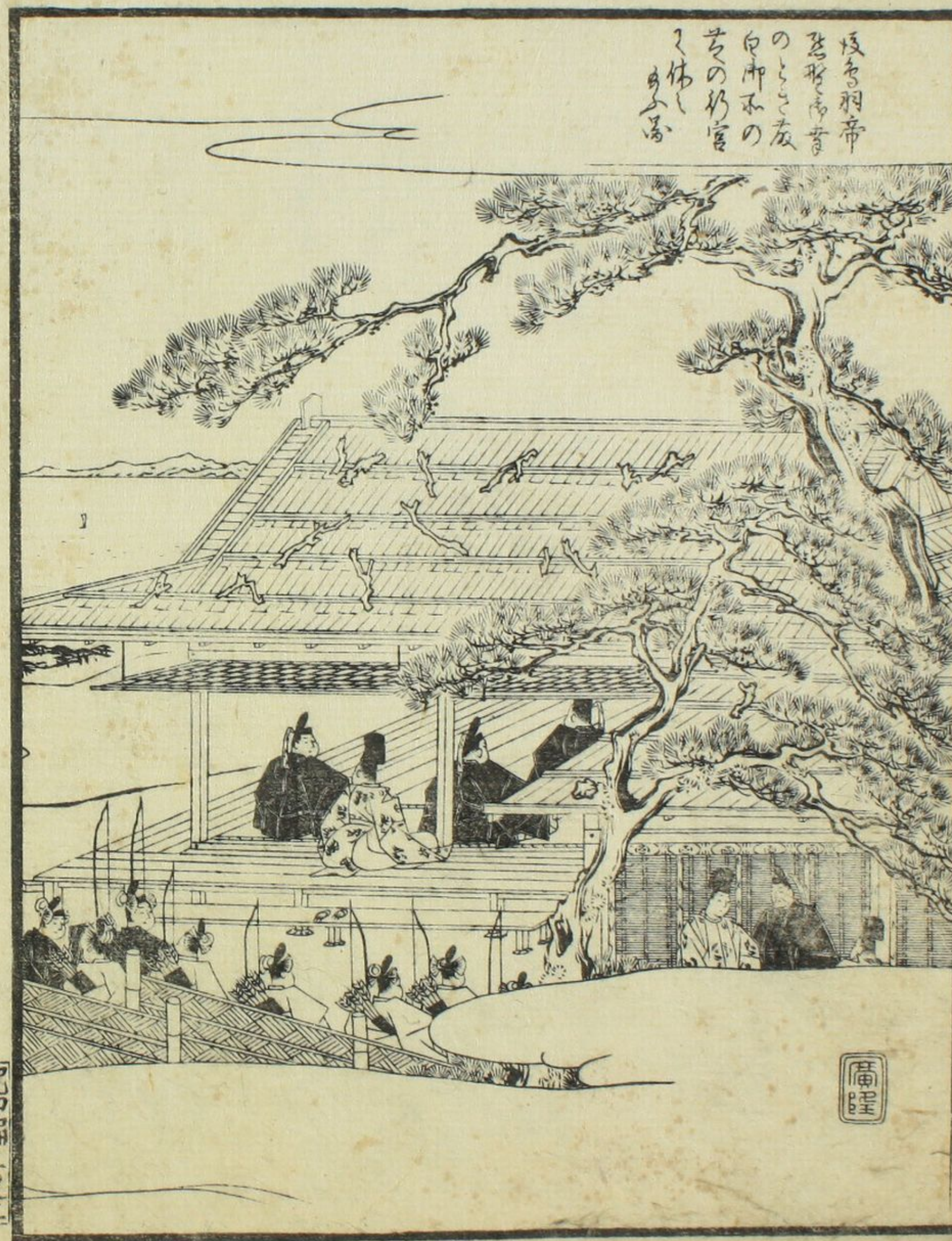
目錄

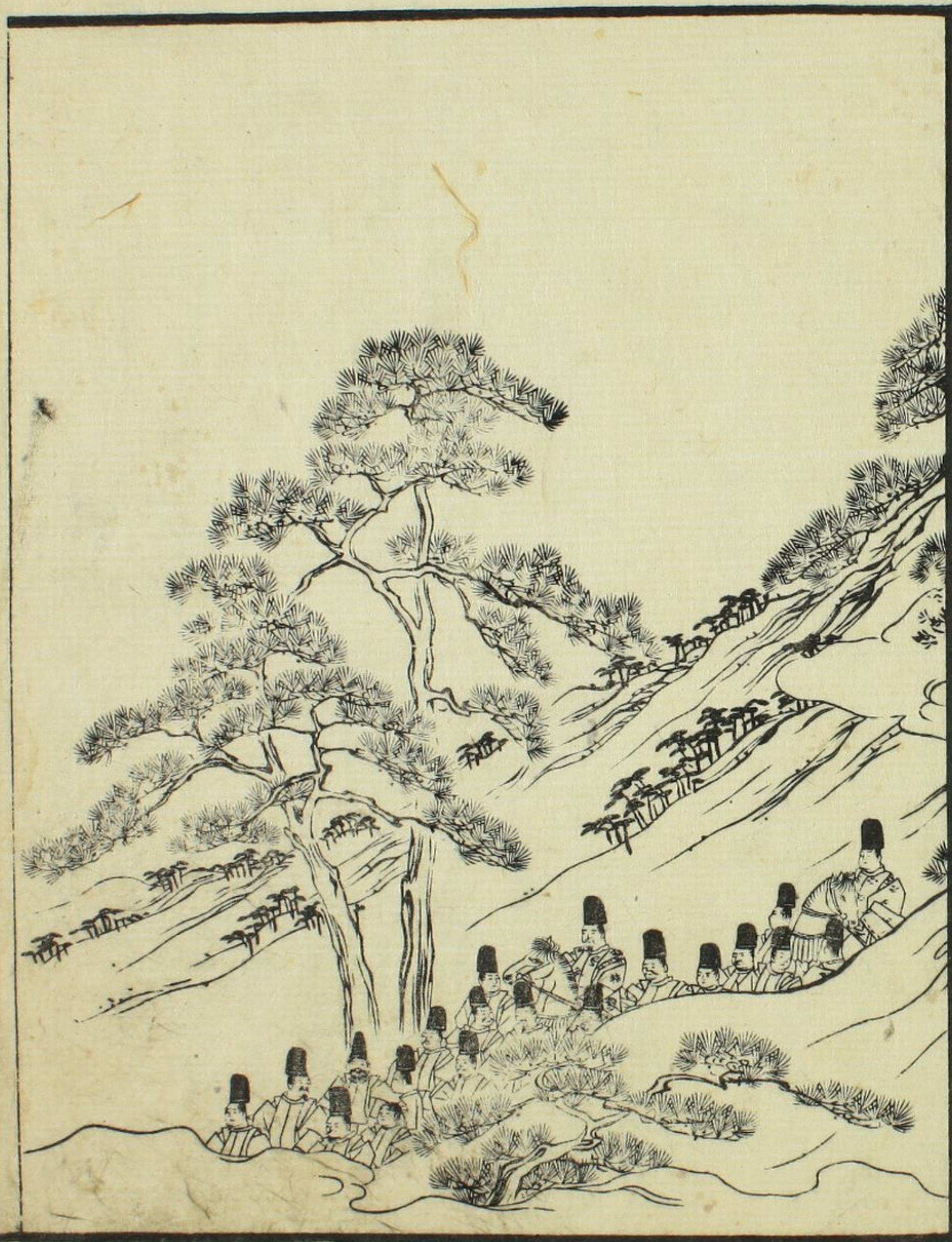
熊野御幸圖
柿本神社
海部郡
地藏寺
岩屋山
仁濟
立神社
蘇坂王子
蜜柑庵造圖
加茂氏城址
安林并圖
熊野懷紙
辰橋樓
加茂谷
御所芝
裏見瀧
竹園社
加茂驛
市坪
地藏堂
釋迦堂
津田瀑布
内原驛
紀直故居
藤代作
塔下王子
上橋
仁義越
蜜柑
山路王子
荻坂
山井崇庵墓
冷水越
名方濱宮
山名氏墳墓
溫石
加茂川
松尾瀧
橘本王子
本村先生祠
白倉山
加茂神社
大崎浦并圖



白木濱
 白魚海白魚取の國
 丁村
 小原越
 椒御殿跡
 荊藻島
 右券
 宮原莊
 八幡宮
 御茶屋芝趾
 岩室城趾國
 莫多郷
 方便海
 塩濱
 濱中郷
 小為平山
 淡黄石
 地寫
 在田郡
 蜜柑國
 荃坂王子
 玉坂國
 天神社
 徳幸行者傳の圖
 荒田皇女
 白石
 硯井
 長保寺國
 儲捨山
 椒村
 沖寫
 阿提
 郡中神事
 地藏堂
 宮原驛
 在田川國
 御所井
 年婁沙弥塔居
 梶原城址
 栗嶋神社
 地藏堂
 明秀寺
 慶西福寺
 長屋王墓國
 右郷名
 形中言語
 山口王子
 宮原宗貞塔居
 安諦川
 圓滿寺
 保田莊

在寫明惠傳記
 須佐神社國
 星山
 淨應寺
 淨妙寺
 望月社
 水粉
 得生寺國
 糸我里
 稱名寺
 堀貫
 宮崎莊
 北湊
 飛鳥社
 安養寺
 本宮寺
 稻荷社
 保田城跡
 高田浦
 箕嶋國
 依明神社
 宮崎
 宮崎氏城址
 糸我莊
 糸我王子
 須佐郷
 神光寺
 祇園社
 外濱
 矢櫃浦國
 立神社國
 慶仁寺
 糸我山國





詠澤山紀集和評

先近者北藤原宣家

と清くえぬあゝ一衣
ゆりきくもわれやみ
木の紅葉みゆきゆり

海邊冬月

くもわれきたるまじき
にきみよのかすさへ
みゆる冬の月か

詠山路眺望和歌

侍従藤原雅經

くもわれきたるまじき
にきみよのかすさへ
みゆる冬の月か

暮里神樂

いづみみ神あはれ
くもわれきたるまじき
にきみよのかすさへ
みゆる冬の月か

後鳥羽上皇志すゝ然る幸
あましくあて和歌の法ありし
る法書あえき其書今も保書
傳るれり然る法書と名づく別
宮も蒙る傲せられ法書及ひのきく本
載る切目王子法を龍虎王子法を那
あましく志すれ法書是なり此宮家
心の法書を志す法書の法書とて
板書も志す法書を志す法書とて
名物類聚拾遺記に法書の法書
法書を志す法書を志す法書とて
年に金二千兩乃賣上り形を
も我々も志す法書を志す法書とて

とて又建仁元年十月藤代
王子和歌と題する書を志す法
書を志す法書を志す法書とて

後鳥羽上皇志すゝ然る幸
宮也青蓮院二宮副法皇有元
龜二年壬申初夜抱く元宮記之定
友之懐念す法書を志す

とて其他十一枚也法書を志す法
書を志す法書を志す法書とて
載る切目王子法を龍虎王子法を那
あましく志すれ法書是なり此宮家
心の法書を志す法書の法書とて
板書も志す法書を志す法書とて
名物類聚拾遺記に法書の法書
法書を志す法書を志す法書とて

◎内原驛

乃山崎村を經て一里餘ありは驛のなりと
長秋記云
長秋三年二月五日乙酉已刻於内原借舎有晝養事元儀藤

代也然而依日高過之於是有一事也過雄山間遇法眼行寛

其後不經程遇實須得業畧

の事なりと後記云
人車記云
仁平二年四月十四日戊寅畧或人云今度御熊野詣每事不

吉御上道去月廿四日夜於内原御宿夜中御屋形焼亡

付二油草一

云云

名方濱宮

日方村の南にありて人衆を名方といひ名方小樹とを名方

ふと云々

名方濱宮小遷坐

地ありては地乃大樹なり

されど里傳に依りて遷坐乃地と今ノ箇に在り

たに濱宮といひ

ふ名方濱宮小遷坐

云云

紀

と云々

乃云々

伊勢部柿本神社

今澤がけに在りて地を名方濱宮と云々

名草郡地祇伊勢部柿本神

鷹樓

弘仁二年閏十二月己巳

紀伊國人紀直祖乃自賣之子

嗣宗言天下之人皆秉父姓身為公民長為調庸而嗣宗獨

無所貫父皆課役是以欲附母戸外戚不許且為他子假濫有

日本後紀云

紀直祖乃自賣故居

久云々

紀

日本後紀云

紀

制伏望因親母之居賜藤代宿禰勅賜吉原宿禰貫于左京

海部

藤代時を以て名草海部二郡の堺とて其地を海部郡と爲す

加茂谷

藤代時より南二十八ヶ村ありて其地を海部郡と爲す

藤代峠

名草海部二郡の堺あり坂長十八町此地を海部郡と爲す

山名氏墳墓

此山名氏氏の墓とありて其地を海部郡と爲す

地藏峰寺

此山ありて地藏菩薩の像ありて其地を海部郡と爲す

勅進聖楊松山心靜

元亨三年十月廿四日

大ニ薩ノ權守新經

河所芝

地味芝の西半町ありて其地を海部郡と爲す

乃奇跡累くして山下を連る定一と云々

乃然て高城嶺より以南の地乳山河乃榮也

乃其基布を坐して一と云々

乃風帆一と云々

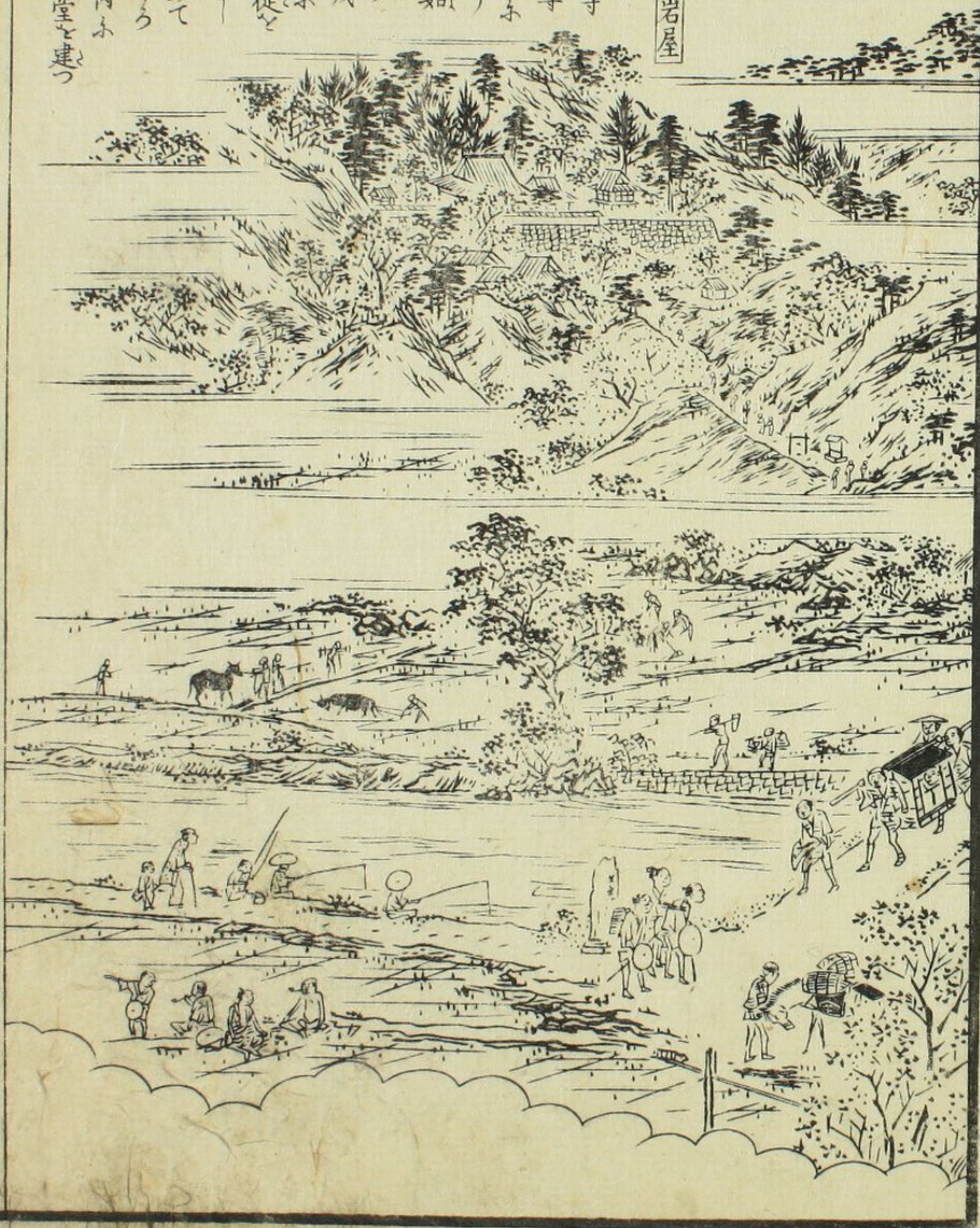
乃其大風十條あり及ふといふ

及拾遺集

源平盛衰記元暦元年維盛熱野活の條云

當寺
 本尊
 の告ふ
 蓮如
 上人
 加茂
 谷小
 門徒
 を以て
 遊下
 境内
 上人堂を建つ

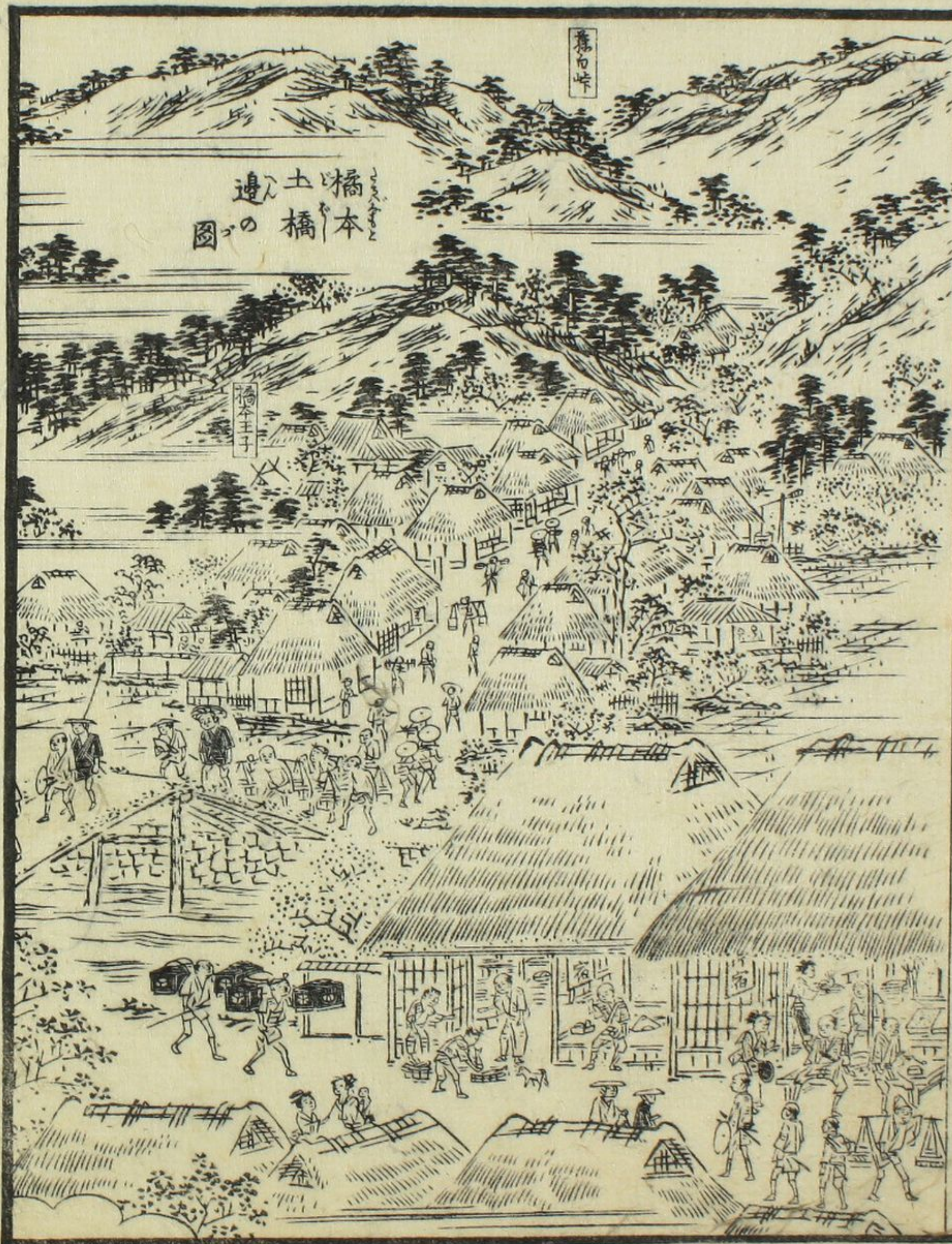
岩屋



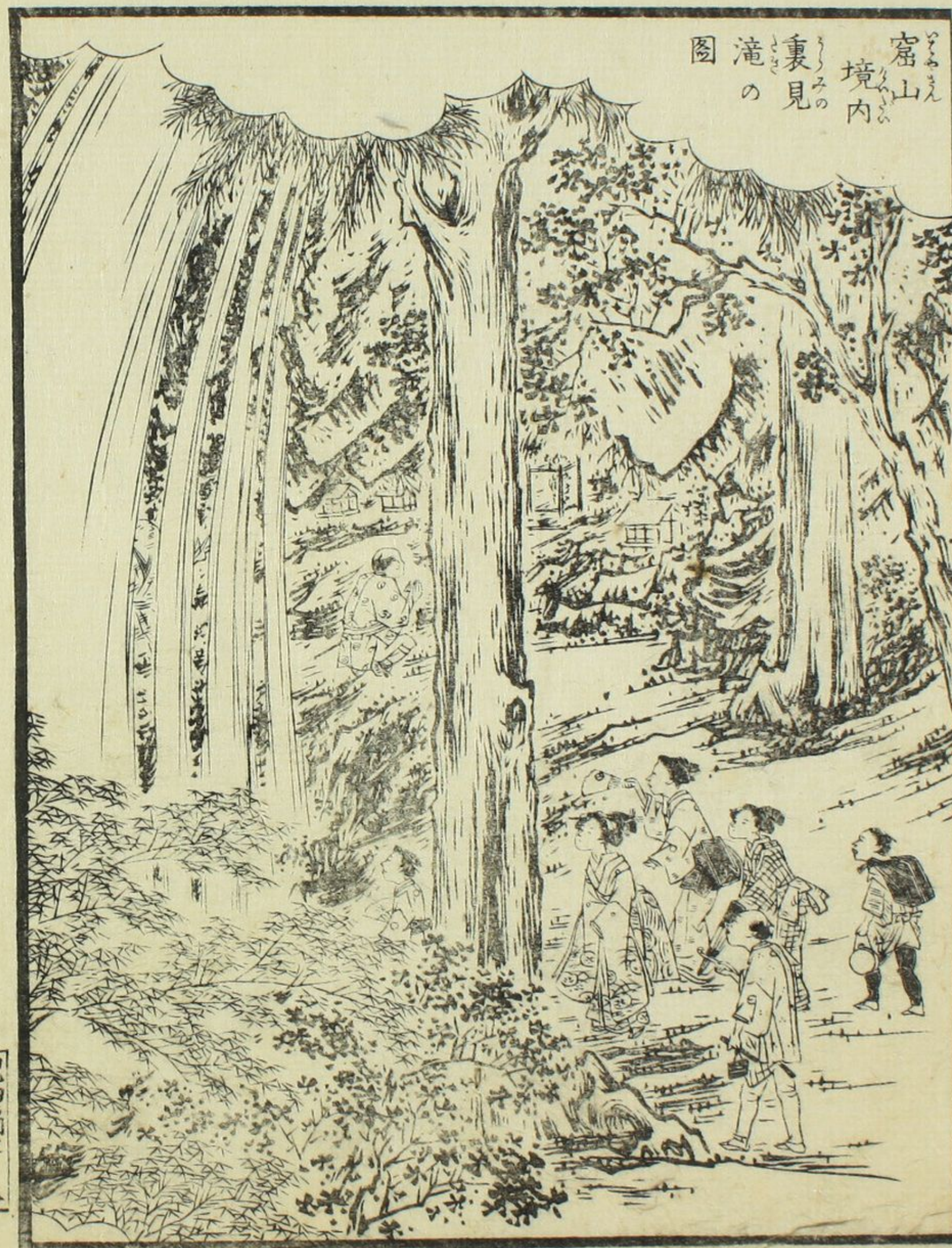
藤田峠

橋本
 土橋
 邊の
 圖

橋本



阿波国



治ひき絶バハ何れも七來迄も人根を具えならんとき時
 入るも先陣申参里より紀伊ふさ森山東と云ふ所へ
 出治ひ森ふさ王子山東と云ふ所へ
 王治ひ所願成就と祈誓し味上里迄ハ眺望
 殊ふ勝もより雲霧くく其の志日ぬを雲升り南
 法とと妻ふ結るをもあひ出てあつたを足援て
 かなざりしをもとぞうを治ひト文和方浦五津島以上は
 宇四浦月あふ慈乃左木の表
 宇治のすを我れ其四浦今定り力に振るお典四七
 もとかとありしをのどよに治王よを典と富さる力
 べい加をもくくより乃銘標
 石州主殿頭母岩屋記
 右乃くくお片おの芝とりや娘はくくく産後わり又く
 ぬ人くお片おの芝とりや娘はくくく産後わり又く
 くだいぬく人いづれも流るはくくく産後わり又く
 一はくくく乃小屋よりわくくく産後わり又く

春海悠々涵碧虛欲晴未霽自模糊空濛々裡數帆
 掛一片青山淡欲無
 仁科幹
 藤白山頭雲伴我飄然兩袖半天風行人到此眼如
 醉萬里滄溟萬里空

○塔下王子社

地藏峰寺お塔より土人あまふ
といふ塔下といふ塔乃塔字なり

建仁元年十月九日略道崔鬼殆有恐又眺望遠海非無興參

塔下王子

○温石 峠より少く南の坂小麓あり塔下王子と云ふ

紀伊國 温石

石屋山福勝寺

寺屋より二町許石あり寺を宗義寺と云ふ内より四木
の樹あり樹の影工甚良とあり以て樹陰寺のり云ふ
あり一と云ふ樹あり樹の影工甚良とあり以て樹陰寺のり云ふ
物多し寛永乃頃堂内にて一七の石あり石は摩訶訶りあり
中堂外あり夥しと云ふ物あり石は摩訶訶りあり石は摩訶訶り
ありと云ふ人々寺の石をかりて石を天竺の石のり云ふと云ふ
寺内ふ狗

表目入

福勝寺より境内あり氏の大義ありて此寺一甚下
然として巖をかりん巖を平る巖を巖上より巖を巖上より
巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より
と云ふつけり云ふと云ふ巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より

家集

石屋山福勝寺より境内あり氏の大義ありて此寺一甚下
然として巖をかりん巖を平る巖を巖上より巖を巖上より
巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より

石屋山福勝寺より境内あり氏の大義ありて此寺一甚下
然として巖をかりん巖を平る巖を巖上より巖を巖上より
巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より

○土橋

○加茂川

源東の南の二山より土橋の上より合流し東よりある
て市坪橋村の村のり云ふ巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より
と云ふつけり云ふと云ふ巖を巖上より巖を巖上より巖を巖上より

仁者

仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者
仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者
仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者 仁者

女園

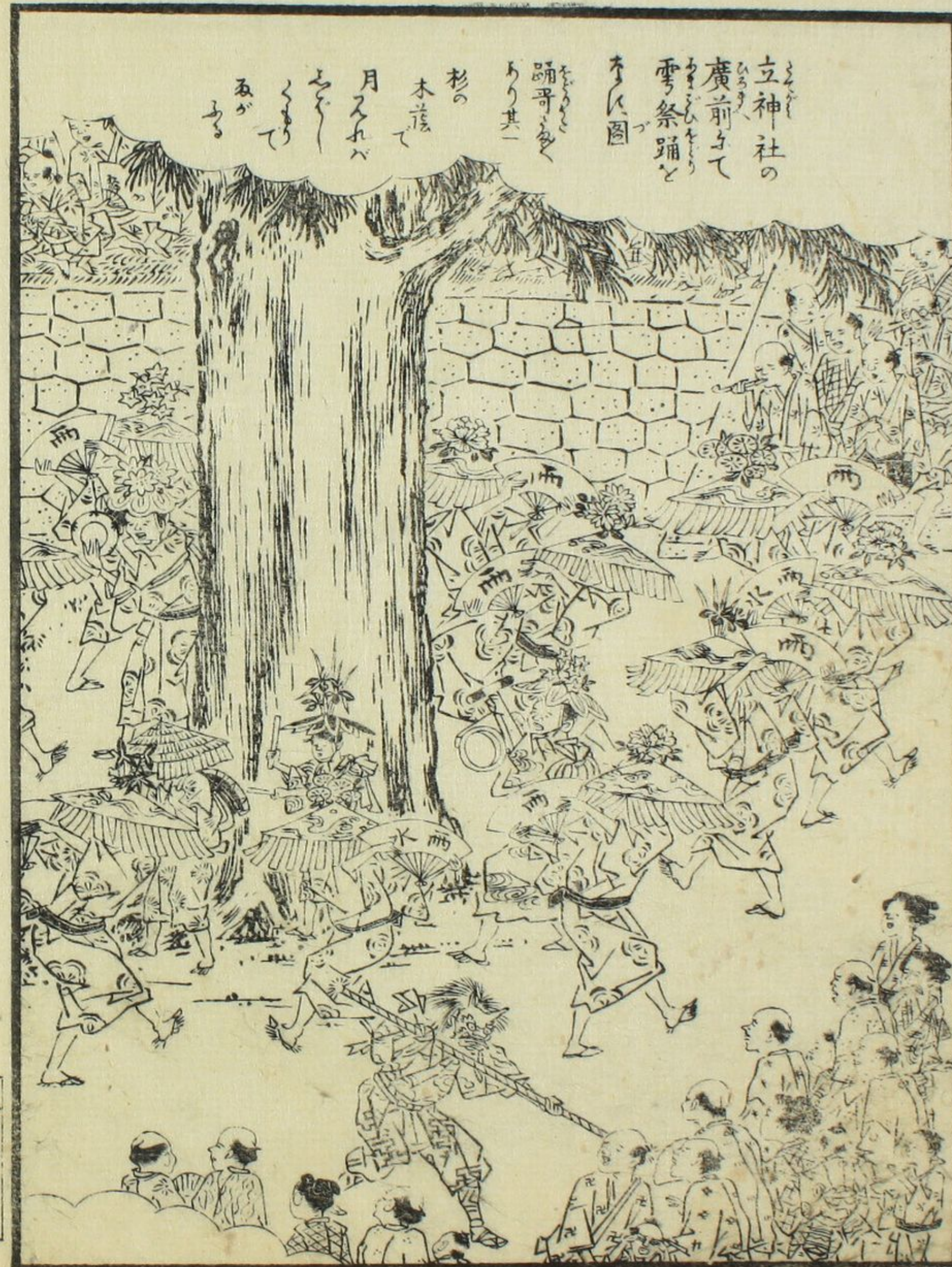
女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園
女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園
女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園 女園

引尾村
立神社地
奇巖の園



凡許愿皆以石為神
凡神藏於祠之處皆
有巨石數丈堆立設
香爐炷香燭於前燒
酒設牲菓砌愿皆就
石致供不設神像也
已中山傳信錄亦書
之凡此等石亦以





同村乃北峠より十三町名草部谷より北峠を越え南底
不垣内、釜畑等を經て、左四郎右垣庄より越え、尾方より

あり
尾村
東山
下
大
所

周村乃小名尾筋あり仁義四村乃産云神かり矣永昭神
を云ふといふ加茂神社の原会考ふべし 保永九月又月

[illegible]

其家一と云ふ本條抜く所許原一と云ふ許越くして
ぬふ候ルんと云ふが如し西の陣突出ても甯ろもの

ハシト其之杭衝乃於
劣れ里
荒を立神と稱ふ

何事及バ
江島多一
南社
何事乃外
旱

季尔嵩里て四うしむの氏子うしこ等社やしろあり大おほ敷しきを廻めぐりて

出雲風土記
 神名通山

あまて早いそにくぬくをくむく零くらく一くとく思くたくるく小く同く

[illegible]

乃形なりかたち又乃箇なりがほ紙しを四よ方はうに挿さ入いれて垂たれ
 下したに懸けんす

得衣をきて、
一層、
と笠とを
兼て、
再び、
笠文を
しるす。

この文字をちぎりをこつ字を執乃具と云此の字

紀四編二十三

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some faint smudges and discoloration, particularly along the edges, suggesting its age. There is no text or other markings on the page.

はふふありて木同かまがれど南社かゝるを南な派はい

た雅^{にが}糸^{いと}近^{ちか}々^々花^{はな}む^むろ^ろの^の一^{いち}二^にを^をた^た糸^{いと}挙^あぐ

子
 上
 よ
 つ
 ね
 て
 ヤ
 カ
 の
 言
 所
 ル
 悉
 る
 な
 り
 ○

の○このむろりそみねづこのヤそんむひとつね

めう
あ
○ 松乃木蔭で月を鑑む
をくゝて

ふる ○なびく稲葉も サふりて民を恵の神垣や

や
○
ス
の
川
う
み
ち
お
く
の
を
と
く
み
て
ぶ
が
な
が
ん
ま
に
あ

よもふうるふふる○照見のどうふ面雪のハ

小霧の月いぶき山

橋本市坪乃二村を驛所
とて内原驛より二里

郷中及び蜜柑を植て産業乃之助けと云其年在四歌の産に
次ぐ大坂及諸ふく運送にるり七十九萬匁と云ふと云ふ

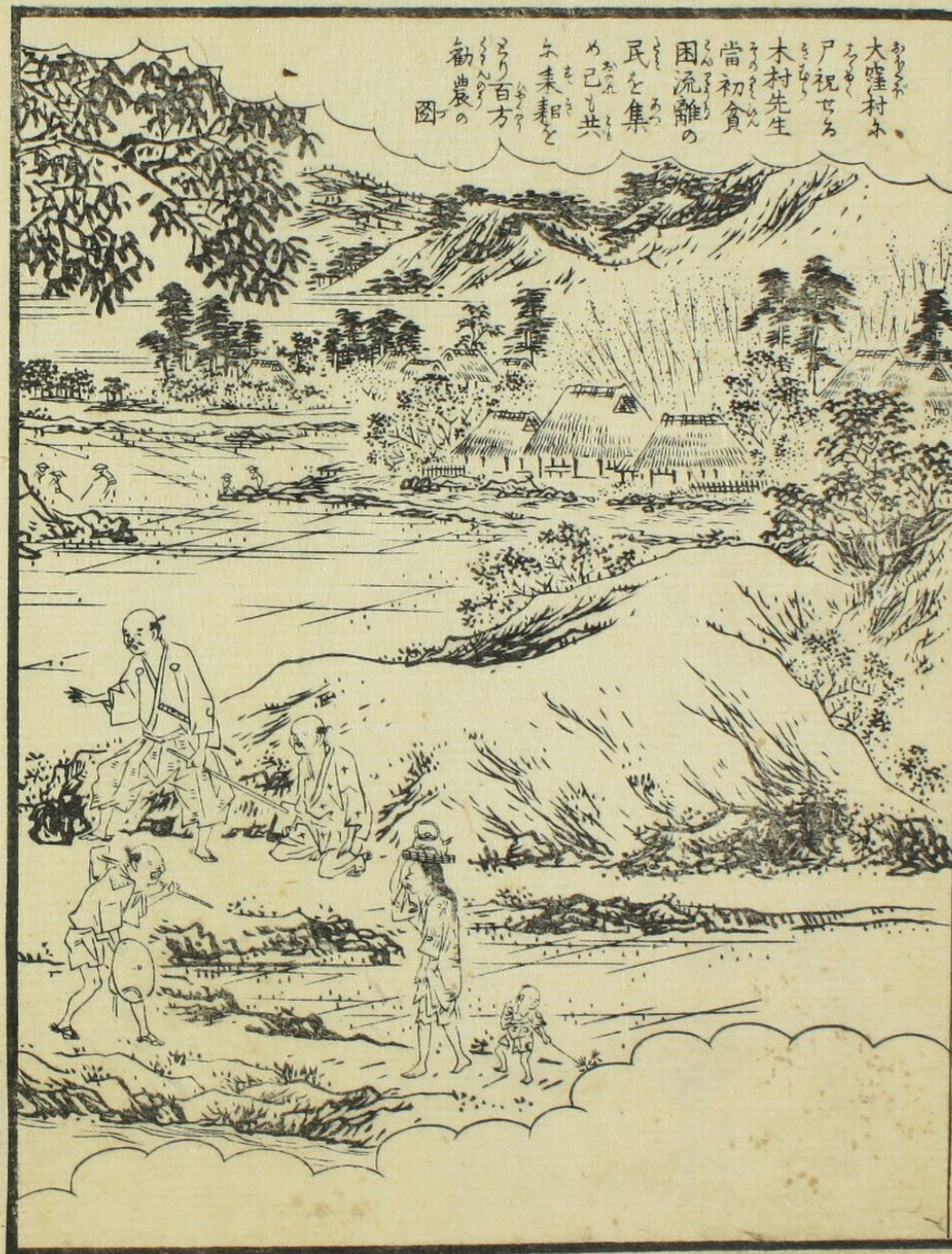
海老木五郎
小島五郎

氏原下

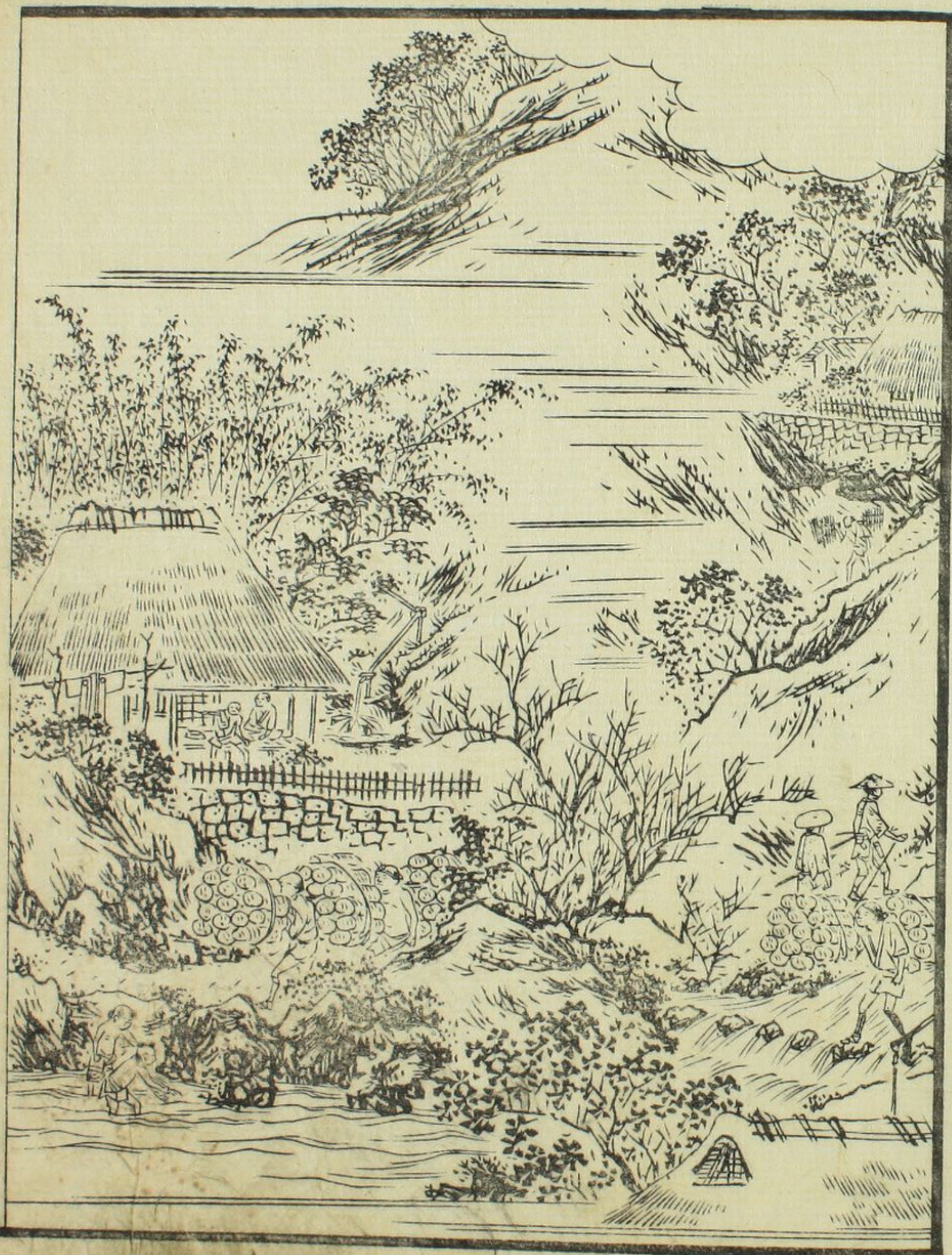
目是江南橘柚鄉耕漁同利滿山霜千筐萬甕年年綠

禾穀蟠桃千歲香

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor creases and discoloration, characteristic of old paper. A vertical line is visible on the right side, possibly a binding edge or a fold. There is no text or other markings on the page.



大窪村
尸祝
木村先生
當初貧
困流離
民を
め己共
ふ来和
るる百
方
勸農
の
図



加茂谷の諸村より
蜜柑、筍と製する園
此、元和の比也
木村氏、在四郎
田口村、あり製
道の法を授て
大窪村の民
糸をく
はくを
くより
始まれ
アと
と



月をえたる一うねりし雲をうひとて
然れども清き水なり

塔下、王子次參^ニ柎^ハ下、王子^ハ柎^ハ本^ハ王子^ハなり。次^ニ參^ニトコ坂王

子次參一壺王子

市坪いちへい 橋本に接する村なり市に併字して甲地乃

○山路王^{やなうま}子^し社^{しゃ} 神^{かみ} 坪^{つら}村^{むら} 宮^{みや} 慈^{あはれ}乃^の 西^{にし}の^の 傍^{かたわら}に^に あり 市^{いち}坪^{つら} 常^{つね}批^ひ大^{おほ}窪^{くぼ}ニ^に ケ^け 村^{むら}の^の 産^{うぶ}主^{ぬし}

本^{もと}村^{むら}先^{せん}生^{せい}祠^で 大^{おほ}窪^{くぼ}村^{むら}産^{うぶ}主^{ぬし} 乃^の 境^{さかい}内^{うち}に^に あり 今^{いま} 今^{いま} 祀^{まつ} 氏^{うぢ} 元^{もと} 弘^{ひろ}の^の 頃^{ころ}の^の 祝^{いのち}

史^し 本^{もと}村^{むら}八^{はち}代^{だい}大^{おほ}夫^ふと^といふ^{いふ}人^{ひと}乃^の 其^{その} 祠^でに^に といふ^{いふ} 此^{この} 村^{むら} 産^{うぶ}主^{ぬし}の^の 氏^{うぢ}と^といふ^{いふ}

[illegible]

紀四編二十六

地藏堂
二 常掛村小 万石面小 地藏阿弥陀
三 龍を彫り ぬき地蔵といふ

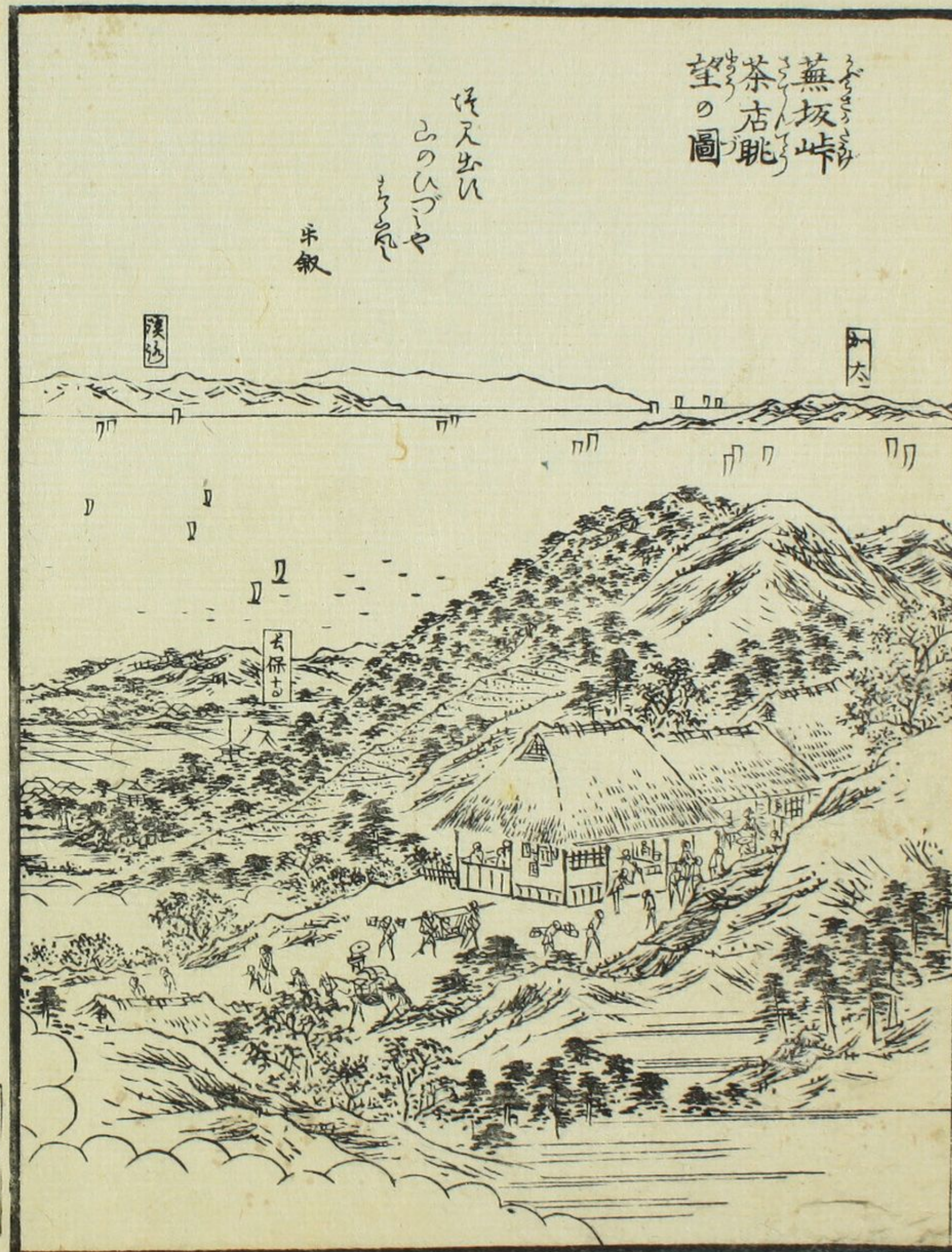
葦坂アサザカ
 之響ノキョウ失ユ用テ鹿カ取トリ靡ヒ坂サカ
 爾ニ曾ソ安ヤス留ルとあハふル
 木キ國クニ之ノ昔ムカシ弓ユミ雄ユウ

○白倉山
て時々怪奇のうろを以て彼方と云ふ乃木と云ふと云へて

加茂氏城址
 乃小山ありて三方小堀あり東に小茂川
 橋より八十歩西小松原村あり長さ二十間

小治より至るは、茂成を中世此地乃、水之かりといひ、佐ふ々、
 一族として中尾、矢次、中、立、柳、橋、八、前、山、等あり、
 藏する文忠、小、授、小、初、を、南、小、舟、仕、
 人と思ふる、至、反、正、十三年、豊臣大將、乾、威、乃、
 此、地、を、去、て、争、ふ、
 乃、文、忠、一、二、九、小、茂、氏、
 中尾氏

本領より子孫お書き
天幕よりは是れ
乙卯年九月十八日
賀茂貞持監作
在野



蕪坂峠
茶店眺
望の圖

河入出
この山づや
半叙

梅田釋迦堂
加茂神社
糺の森



四ノ宮

ちのちれ
おのれを
さしむ
こころれ
おのれ
ちのちれ
ちのちれ
水崎久道



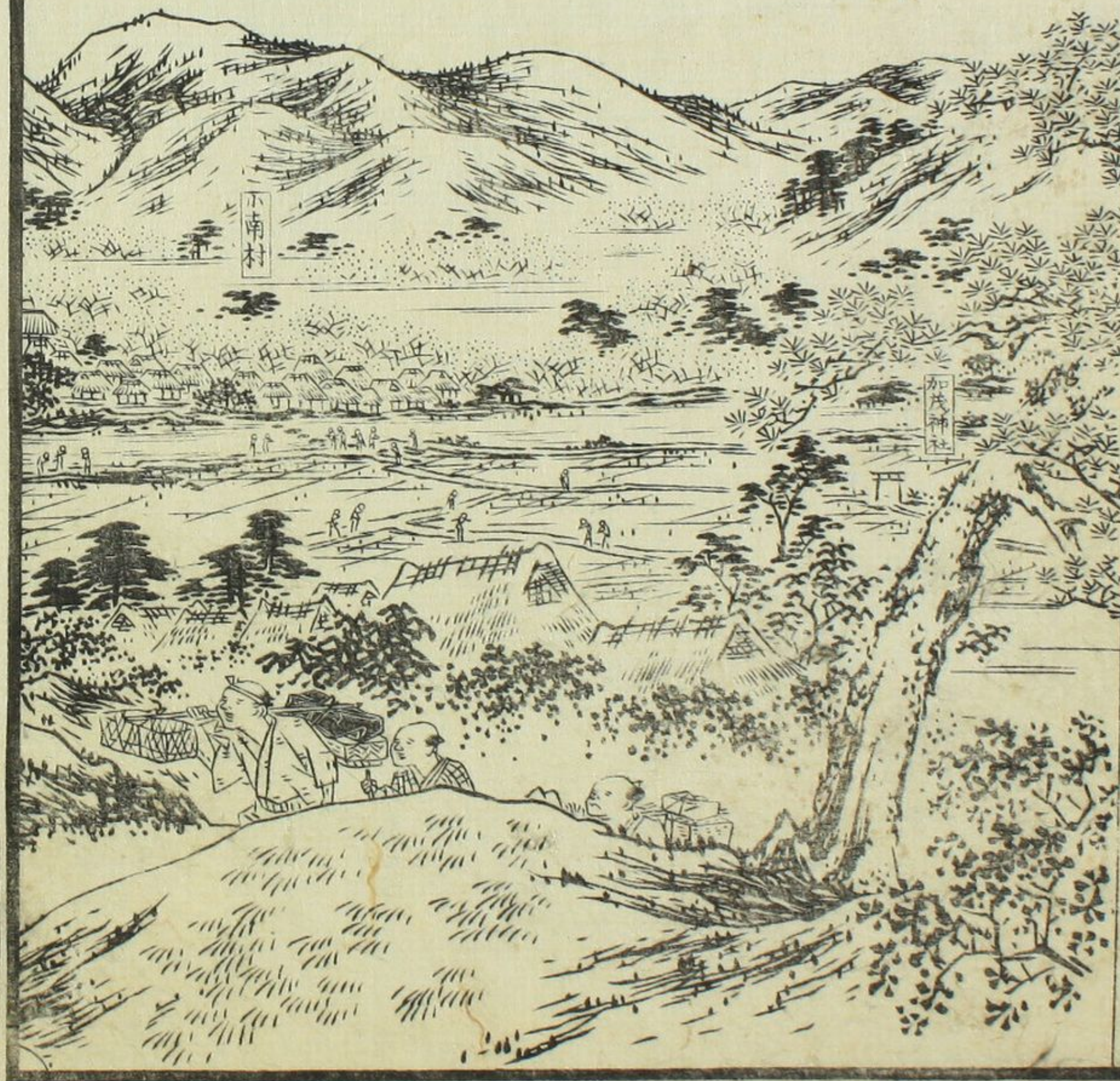
下村あり七ヶ村の氏林と
社あり七ヶ村の氏林と

下村あり七ヶ村の氏林と
社あり七ヶ村の氏林と

谷川の
 舟にのりて
 ゆるめり
 えれども
 あらね
 るれそね
 拾栗山人



名草谷冷水浦
 ようと浦士能地
 浦へく申ふ路
 ちてか谷名乃
 梅林谷中む園



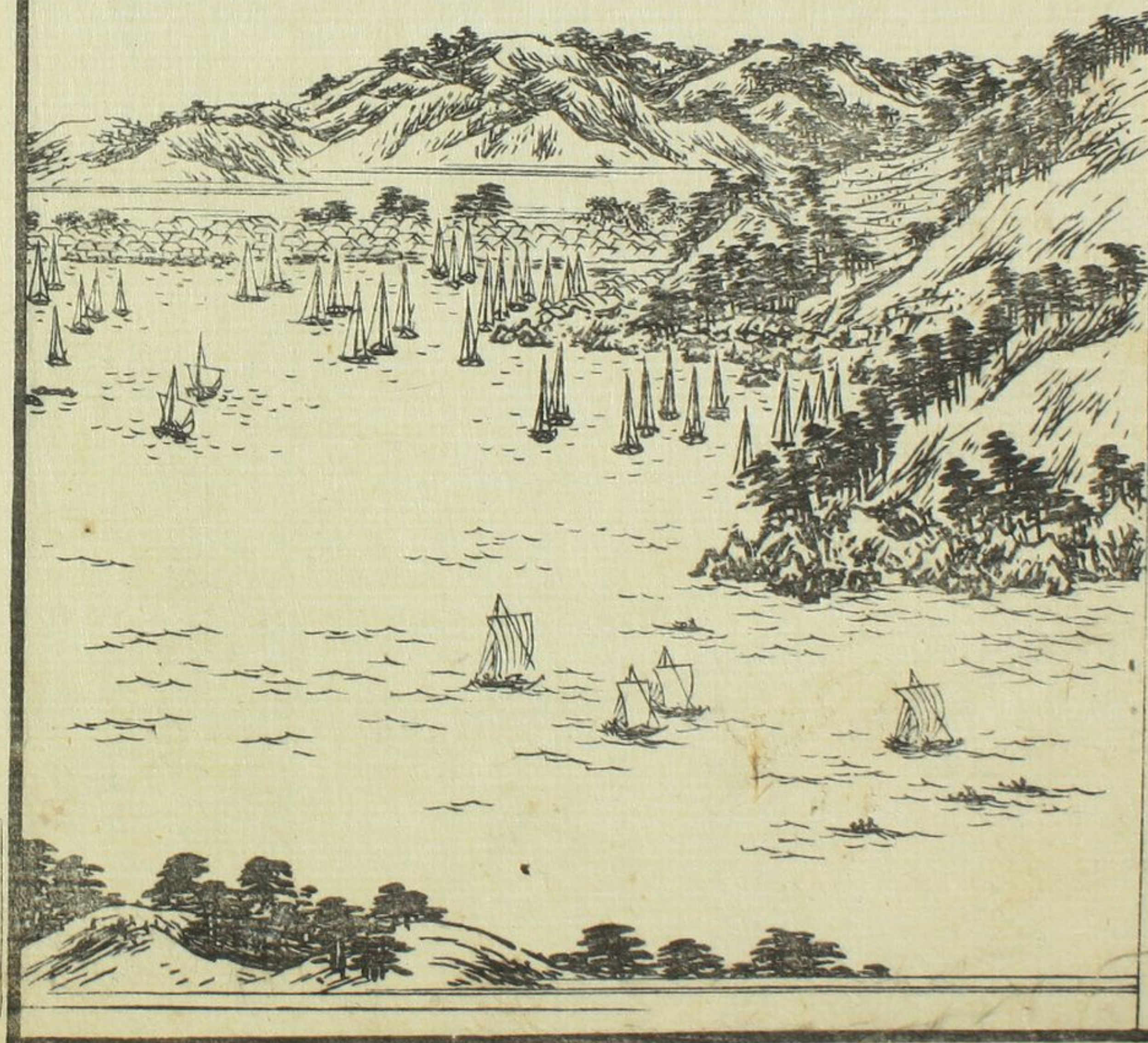
大壽浦

下村の北、山を冷水峠と云ふ。郡下より
乃半坂を西へ行きて去、偶々市街づる所と水
越の下の淵ありて、河内安土なる肉店曲を
うけて居懸かり、因て村中紙花を業と人

老衲縱^二嗤^一老衲癡雅人自有雅人知年來未改年來癖

大寄浦の図

夫木抄 前中納言経光
 といふをいふ
 うけつて久しき
 大寄浦の図
 光俊
 大寄浦の図
 大寄浦の図



大寄乃白石の古き
 紀伊の石とんく
 公の御用
 大寄乃白石の古き
 紀伊の石とんく
 公の御用



同十二

大崎オホサキ之ノ有アリ磯ソ乃ノ渡ワタリ延シタ久ク受マテ乃ノ往ユク方ヘ無ナク哉ヤ戀コヒ渡ワタリ南ナン

この歌に紀温泉の幸の時など東の地を廻て
よめる歌に於れども脱と云へるうなり

白木濱

方便海
說下凡
有里

大崎浦の南一町許乃族をいふ八雲原抄亦白木濱を舟の名所と云ふは地をいへるなり

紀四編二ノ廿二

方を乃字派ぐて一方便海の亦幸ふ乃地名なりべしれど
 りか又を所あるていへりかきと所といふもあつて
 なるう然らむわさつみとよむべし神我手も海神の
 まじりのふりて地名ありあらざるやといひる
 今日概に大崎の神の小濱といひ方便海の神が
 もといひ又は飲の下に津が崩荒石のみえくともみ
 在田於の海岸小白神磯られバ神ハといひ津近にい
 つるふをあらはせ此海濱の地名なりといひ又因集ま
 津之渡神之門等見えくるも同あつたりを神バカム
 と派では所の磯谷加茂谷のか茂と同茂かりらん
 概なくおきて
 及乃考をす

白石

又大崎のふたつと石簀純白なれ
水戸の如くつと學散せん

延喜彈正式云

凡紀伊石帶隱文

其画文を刺^スるくどめたる玉を解^トるを陰文の帯といふ
装束抄に陰文と書くるあり隱^レの字を用^フゐるを
いへる
王者及定摺石帶參議以上刻鏤金銀帶及唐帶五

王者及定摺石帶參議以上刻鏤金銀帶及唐帶五



方々川口にて
白魚を取る圖

白魚也
多しゆれい
ふゆれい
四月廿四日



位以上並聽着用紀伊石帶白誓者六位以下不得用之

紀伊石無文王等公卿除節會行幸大饗列見考定立后仕大臣相撲召合慶賀等時之外著用無文

映玉雖有文四位五位用之

和名鈔云

革帶 唐衣服令云革帶玉鈎今按革帶以其所附金玉石角等為名故有白玉

帶隱文帶馬腦帶波斯馬腦帶紀伊石帶出雲石帶越石帶班

犀帶烏犀帶散豆帶等之名其體有純方丸鞞擲上等之名革

帶是其總名也

梶原城址 大崎浦乃山上ふあ至今地とされ里梶原村梶原城址

産物白魚 加茂川にのりふあり海にうきふあり

塩漬 加茂川にのりふあり海にうきふあり

硯井 同村山麓の勢疾く冬夏増減あり

湧出 湧出泉とあり是も亦鹽泉湧水の類なり

栗島神社 同村小名中心あり海にうきふあり

丁村 同村の東にあり地をわたり

濱中郷 和名沙及鹽泉記下卷中區連祖父麻呂者海部郡濱中郷人なり

本堂 方七間 奉安 將迦如末額字 右 寶塔 東 護摩堂 左 棧

食堂 左 阿彌陀堂 九 鐘樓堂 大門 金剛力士ありた

本坊陽照院 子院 専光院 最勝院 本坊院 地蔵院

西福院 西福院 西福院 西福院 西福院 西福院

寺傳云 一條院の勅願所にて長保多中の草創なり

故寺寺号とて軍臺と慈覺大沙の門徒なり

慶徳山長保寺

家集

正月十日 濱中長保寺子て

九子

源令綱

同

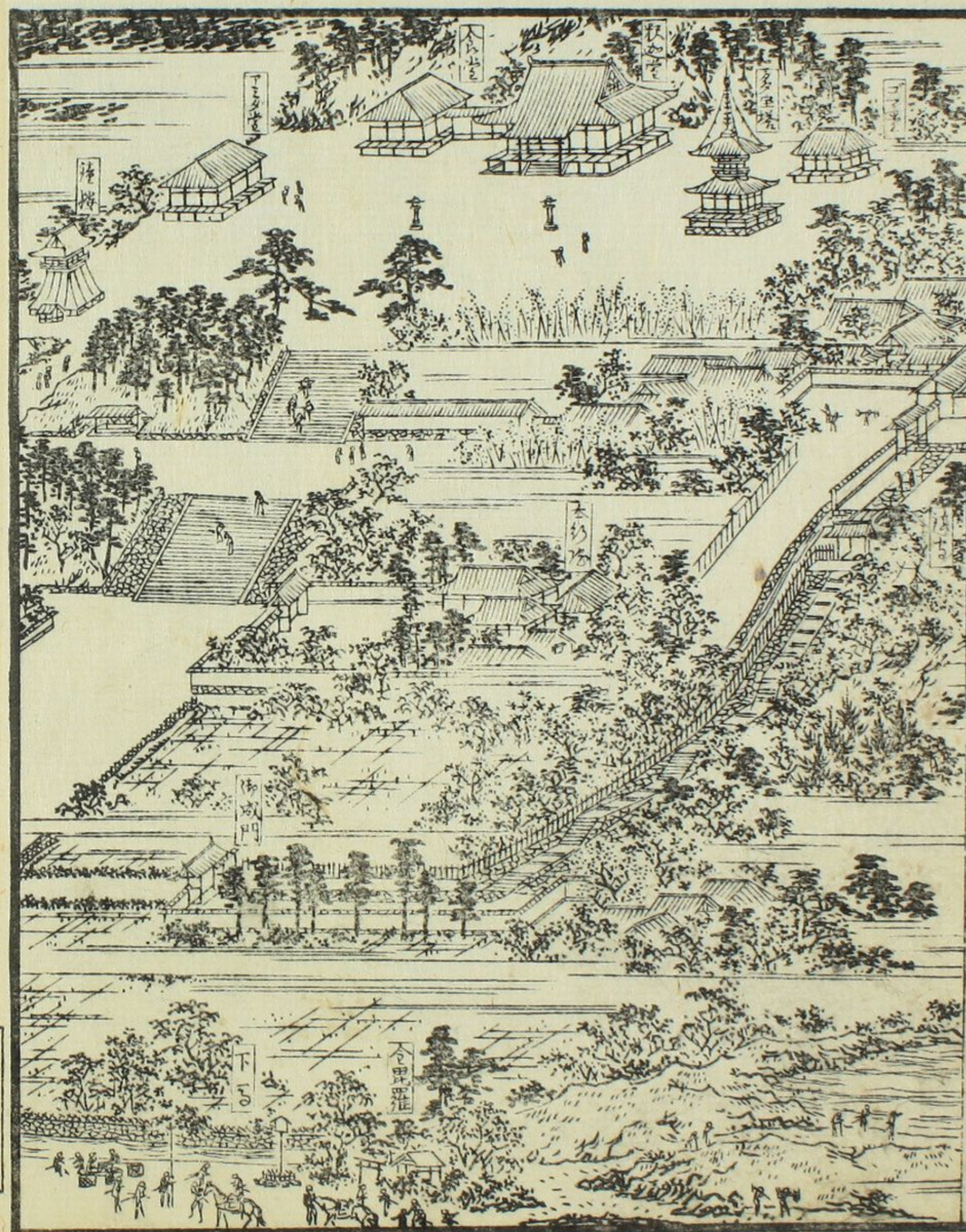
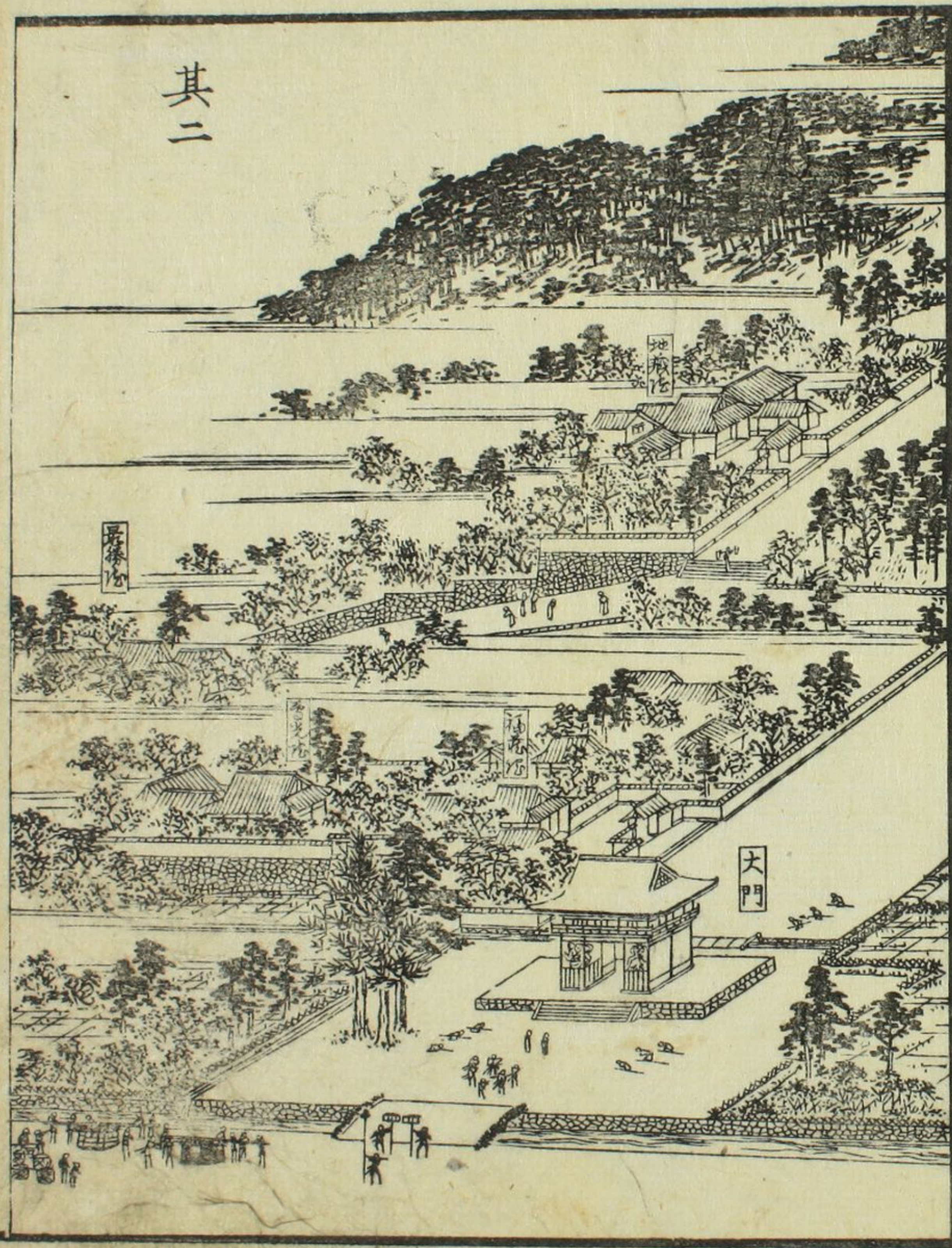
さへうるやの風もやどをむきぬれ山の樵夫

同

題長保寺

永田平庵

其二



山頭孤殿在，造建是何朝。
空廂蒼苔鎖，斷碑古心搖。
濕衣春靄起，注目暮江遙。
四顧傷神處，老僧獨寂寥。

溪上幽居不用扃靜兼魚鳥欲忘形滿山紅葉皆如

醉一樹青松似獨醒

地藏堂

小畑村文坂乃少一トあり反原古藤路
乃基といふ要古蹟乃人ナリといふ

坡 同

村の川を左の隅の場と云ふ集の小島寺山を
 の山の山と川を右の隅の場と云ふ集の小島寺山を

小爲年

山 万葉集古事ノステノヤと云て、海の名稱より異なり、緒拾
山年婁郡ありといへ、ルの今、蓋坂に、ミの山、サ、サ、バ、安太

た 中

今又坂のふもとに

を以て友

安太部アタベ去小ユクコ爲手ヲテ乃山ノヤマ之真木マキ葉毛ハモ久不見者キミナミナシ蘿生ラクセイ爾家里ニケリ

緒捨山

小爲手山の急所の誤より出て
名取とたれまを此より変に

日 殘

五玉珠捨乃山珠月新尔死てみぐく様のもてゑあ
藤原基任

10

夕々絶えぬ捨の山乃吾の上うへも接くはにのど様もそと 源有家朝臣

聖

ねさめね控のい乃さの上糸くまに敷き
前参議敦有

紀四編二升八

家集

4

以存其
同

夫木抄
曰

奇

天山
建武

越

石

薑里。

のと
う々

かちん

福

仁航

凡具

1

秘

死行 御室御領西條后藥師堂

當に公文三景

列南藏す

右條列南藏者三景す令進出者后官百姓
等すと存せし件

嘉應元年八月吉日

西福寺

足利尊氏公草名

右軍執并甲し余ふり政乱入狼藉者

有遠死北半 ちの雲を斜に映す

建武三年十月廿七日

柵洲殿跡 板濱村より

南風集

中秋陪

明公遊柵里看月

永田平庵

風拂雲烟月正團江流千里泛金盤更無一物遮清影

應是乾坤別樣看

地名

柵洲より七八町西海中あり是柵洲の地なり或ハ四つ

柵洲より西の方より四町半あり

地名

柵洲の西海上より一町あり是柵洲の地なり或ハ四つ

賞状

左大臣長房墓

中島ありと云ひ傳ふれども其處に墓ありと云ふ

聖武天皇の御世左大臣長房は天武天皇の御孫高市親王の子なり天武天皇二年二月



左大臣長屋王の遺
 骨を土佐國より椒
 村の奥嶋小辻葬
 むる圖
 此支靈異記及扶
 桑畧記今昔物語
 等小と載せり
 秋田集
 けうはのまを
 ひげうらほふ
 ねふり
 へん
 建曆



采同と参考せれ
いひふる

靈異記中卷

特已高徳刑賤形沙弥以現得忍死緣第一

臨樂宮御宇大八島國勝寶應真聖武太上天皇茂大抵願以
天平元年己巳春二月八日於元京元興寺修大法會供養
寶勅太政大臣正二位長屋親王而佐於供衆僧之同時有一
沙弥盤就盤供養之處捧鉢受飯親王見之以牙冊以罰沙弥
之頸破流血沙弥摩頸損血怖栗而血不觀而去不知時法
會衆通俗偷曉之言凶之不善矣遂之二日有疾婦人跪天皇
奏長屋謀願社被將棄國位爰天心瞋怒遣軍兵陳之親王自
念无罪而被囚執此決死爲他刑致不如自死即其子孫令
服毒藥而絞死畢後親王服藥自害天皇勅捨彼屍骸於城之
外而燒末散河擲海唯親王骨流于土佐國時其國百姓多死
云百姓患之而解官言依親王氣國內百姓可皆死亡天皇聞

之爲近皇都置于紀伊國海部郡掛村奥嶋下

因ふ云法本抄掛奥嶋ふはる抄を村の湯嶋を嶋の傍を
北に改む既ふ今も物産ありて記し奥嶋と云
を里村のふと奥嶋の嶋の字を誤りて奥嶋といへる者
ありてはより土人此王
乃基と記す傳へり
荊藻島 地を乃海に上るあり一を木荊藻一と小荊藻とい
ふはる乃加持と云と因ふるれどこの島を車田島とい
ふはるなり

在田郡

南紀東に伊勢郡及大和國を經る所也 南に日海部
二郡あり北に伊勢郡那有る名海部郡也小規牙根掛んこ
乃方海部郡なり

阿提

當郡の地名なり 持統紀三年文武元太寶三年聖武
元丹野門等に見えり 全文下の條より載ん

日本後紀

大同元年秋七月戊戌改紀伊國安諦郡爲在田郡以詞涉天

皇諱也

帝王編年記伊品波字
類抄等の法書皆同

因ふいふ天皇の御名を越えて姓氏地名等を改るる

續日本紀小延曆四年五月丁酉詔曰臣子之禮必避君父
諱此者先帝御名及朕之諱公私觸犯猶不忍聞自今以後
宣並改避於是改姓白髮部為眞髮部山部為山と見え
るは從之始ふて 平城天皇の御名阿堤を避けて
豫國神登郡を新居郡と改め 淳和天皇の御名大伴を
避けて大伴氏を伴と改め從へ皇孫皇孫の左衛門
卿名を乳母の姓を以て從之或は御名代を以て從之
て從之を永世傳へ從ふ所なりしは延曆年中漢風
倣ひてける新制を建之りしを 平城天皇以下從
皇用之從へるなり然れども御名を同くする姓を
改め地名を改めんといと煩らば混々從之
仁明天皇より以後は姓氏地名を獨りとする御名を用ひ

延曆の初め 光仁天皇より 淳和天皇より
てふ帝より廢る上右の初めを倣て廢れり
右郡名 郡名抄ふ廢れる所は郡名英多 溫江を倣奈
續日本紀

嘉祥元年二月癸酉紀伊國在田郡爲上郡以戸口增益課丁

多數也 戸令おん郡大里以下十以上里以上爲大郡十二里以上
上爲小郡以上里以上爲中郡四里以上爲下郡二里以上
唯ふ郡より附の上郡と以てき得り 郡名抄ふ郡名を從

在田郡司解 申依式賣買新田并家地畠地等立券文事
合地伍町參段佰肆拾肆步 惣價直稻參付漆拾肆束
新田參町佰肆拾肆步 直稻貳仟貳拾肆束
一所和統村七段二百十六步 直稻六百八束

在田郡司解 申依式賣買新田并家地畠地等立券文事
合地伍町參段佰肆拾肆步 惣價直稻參付漆拾肆束
新田參町佰肆拾肆步 直稻貳仟貳拾肆束
一所和統村七段二百十六步 直稻六百八束

門田五段

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸四百束

為八十束

阿弥施道四百卅四步

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸卅五束

為八十束

垣內幡田西圭一段

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸七十九束

垣內幡田七十二步

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸十八束

段別九十束

大町南圭一段

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸八十束

一 所丹生村九名七十二步

直隸拾佰參拾陸束

為八十束

荒木田二名二百十六步

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸二百八束

中荒木田二百十六步

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸卅八束

高苗代田二段

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸百六十束

島田二名

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸百六十束

北聖斑原田二名

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸百六十束

一 所大豆田村聖田九名二百十六步

直隸四百八十束

為八十束

直隸四百八十束

段別五十束

直隸四百八十束

為八十束

一 坪一畝

同村聖田

一 坪三段百廿步

同村聖田南圭

一 坪一畝二百廿一步

同村古森南圭

一 坪二段二百廿五步

同村古森南圭

一 所同村梶原田四段

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸四百束

段別百束

炭地一町三段

直隸伍佰伍拾束

一 所二畝

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸百五十束

段別五十束

一 所一町

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸四百束

段別五十束

一 島一町

四至

東至百姓口分田 南至百姓口分田 西至百姓口分田 北至百姓口分田

直隸參佰束

為八十束

右得擬大願紀原稱真貞狀得已新同并炭地畠地等依式常地而流權大糖都
修燈大法沙位真濟大匠既託老依解狀郡加勘察所申有實仍為後勘賣買
西人署名立奉文如存以解

專賣外返八位上紀原稱真貞
父記六位上紀原稱 千奉

貞男 成人 今曆

買人斬

副撥大願外心位下紀朝臣等

擬少頌无位紀朝臣

國朝參通
買人新

守先已位下紀於南高

正
位上行外紀朝臣

正六位上行
椽當麻真人
從六位上
勲八等行
權椽伴宿祢
從七位上行
大目足守臣
從七位下行
少目
新破連

按ては、永春、文永、永興、永和、代丹、生大、生田、小島、野村の八村、今之丹、生小島の二村のみ、隠蔽に其地、甲地、乃字、及人、名等、分帳にあり。

産物蜜柑

皇國の橘類の生ひ出づる所を種蒔し神代の昔より根づく
し將海外より渡り來しう慥ゆら知ぐさ程と西を問ふ

かありよる王使傳ふる載し此る王然もも願毫
けり常立の國ふ索る跡ひり紙抄りハ海内ハ
未培養せざる王一り或非時と河紙を今の盧播乃類
あらむる家州北乳柑々ハ此の頂より王
を降る余麻莊ふるを王一り小樹れて氣味植るより人天
其類ふれを近々の柑ふるもお移して樹柑よりを
雲ののりへ囃より王谷蓋のさるる際より延衰ふ
聖乃るふ葉万株の乳柑茂林紙ふりて今も王下最
大の產物とるふりぬ其葉時々東風海上で渡りて
阿波の境ふる魚越る王其熟の候ふる雲氣頼り
て乾燥ふ氣と漲れ王九月にふるを摘る此紙
進取と頂それより王志て教ふる摘るこれを靴
紙も少く糸板ふへ小紙ふて撰る此王寛永十一度陸川系村
なる計大船ふ接てふるを王一り小紙ふて大なるを
割る此ふそれより王其葉ふりて紙を二重に金河屋ふる
をぬい今ふりて大俵なる田中よりなる万葉紙王土紙
かありよる王使傳ふる載し此る王然もも願毫

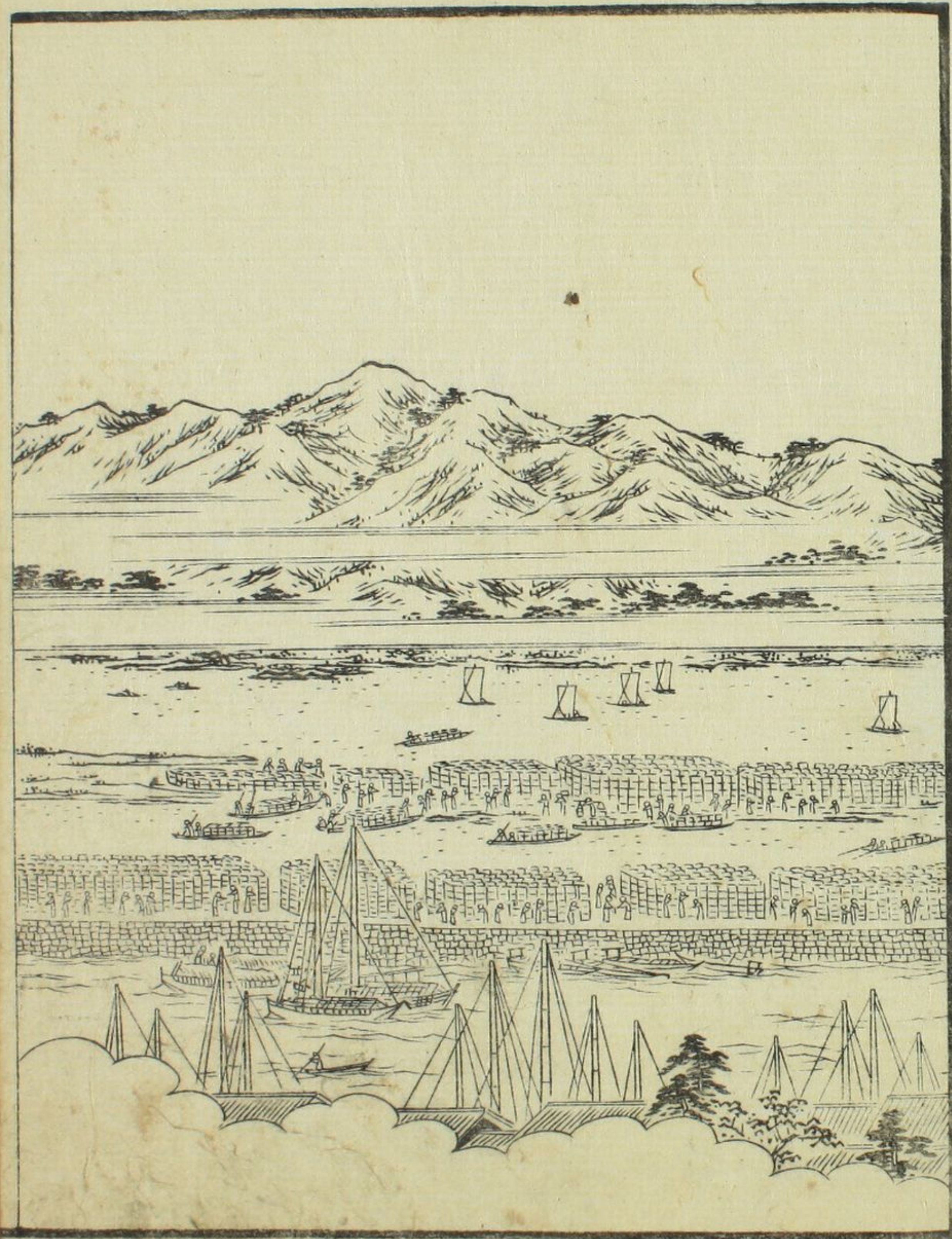
南海集
黃柑南土出枝葉亦
婆娑結子五六月金
九霜後多可同橙供
客不若摘除病若不
及時採其如敗絮何

那中
山烟
密柑
之圖



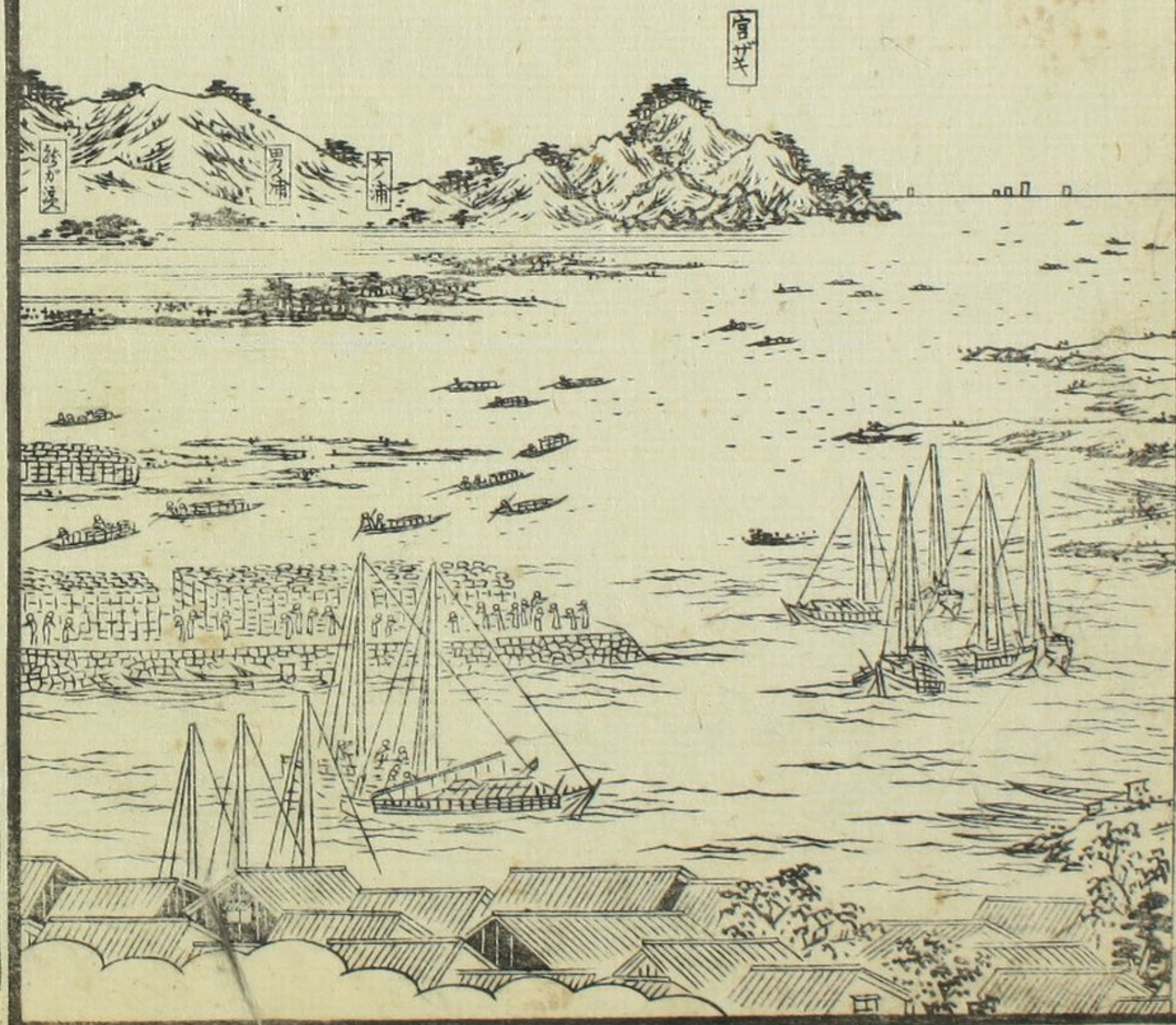
[illegible]

其二



其三

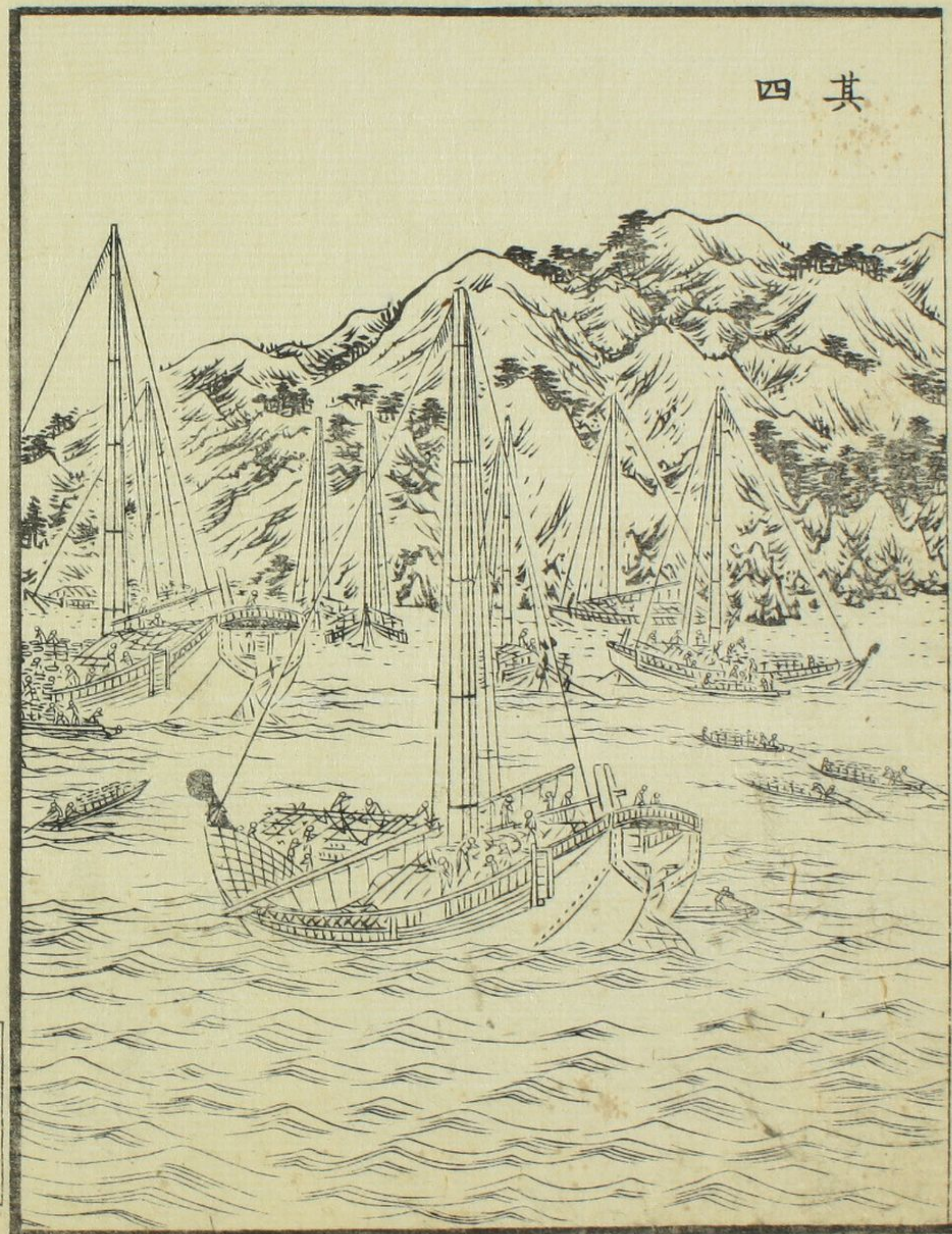
北溪の海口本築出し
 あり波塘の上へ船中
 張あつとと輪漣をる
 蜜柑を山のて
 夥ふく果積とて
 ごと程保とるも此海
 港の習ふ充満は



みづうで
 安井新次郎
 木の下で地を
 かき大船つ
 こむ図



其 四



法社駟馬祭日次

廣八幡宮 ひろ
度莊
八月十五日

岩倉社
九月二日

天満宮
辰通莊
九月九日

漢統社
九月十四日

立神社
九月十六日
寄莊

九月十八日

凡法用乃法雅言を五十音の第三音としてゐるを俗に第二音第四音としてゐるを大りと同じ

其一二をいふ見ゆるを記えたるのひみ
いふをいふ然るく華坂を記えたるのひ
云はれを御推言のよお第三音の正し
調をしるれを狂歌非落第の雅體の作とい
用ををる事か然るお耻て俗人却てこ
く笑ひ人お此を耻て強て俗を習ひ用
古風の變願獨これのみやあ
らん豈に慨難せざるべけんや

蕪坂を以て所轄郡加茂谷の堀
以下六ヶ村と爲る

王子社
芝坂の上
ふあり

御奉記
次昇カブラ坂参カブラサカ塔^{タゲ}下王子又崔嵬次参山口王

字_ニ 奉_ニ 虫_ニ 塔_ニ の字を脱_ニ 今道間記よりて

墓坂乃半猿^{ハルイヌ}跡^{アト}乃^{ナラバ}石^{イシ}尔^ニ地^チ藏^{カウ}乃^{ナラバ}像^{ゾウ}之^ノ彫^{カウ}

記云定乃四面布菴々（一）佛々（二）とありを堂ハ（三）及（四）とあり
 かり瘡疾の者洗米と（五）然（六）て立臥（七）は違（八）バ（九）愈（十）癒（十一）と（十二）もハ（十三）聖（十四）按（十五）之（十六）
 小靈異記玉坂乃石寺の席に以指爪（十七）甲（十八）而作佛像云云
 と見えざるに（十九）より好（二十）ふの者附會（二十一）して（二十二）勝（二十三）妙（二十四）と（二十五）北（二十六）が（二十七）平（二十八）

土子社 善坂の麓あり
引り寛文記の文上
ハ鰐王の子と書り

なり毎に九月十四日を衆日とし

社傳云弘仁七年^{（八二六）}草創^{（草創）}於喪^{（喪）}見^{（見）}の^{（の）}世^{（世）}を経^{（経）}て久^{（久）}く廣^{（廣）}願^{（願）}

乃ちかりが弘安七重漸やや亦再興ふたたび之を後い更う尔又書か胎は右元

年尔源常久永正十二年尔源順家天文十五年尔万恒丸源

某等学敵のあつたり宮殿の修繕を加へ神領等も若干



玉坂の
故事



玉坂の故事

寄附ありし天正年中没収されし一里
又正保年中雲祭に氏意ありしを記す文
を藏む事社の右水主神社を祀りし事
亦記す位下水主神と見えしに記す
氏社家也

玉坂
石寺の左より右へて人の堂なりん
村童戯刻木佛像愚夫斫破以現得惡死報緣第廿九

紀伊國海部郡仁嗜之濱中村有一愚癡夫姓名未詳也自性
愚癡不知因果海部與安海通而往還山有山道号曰玉坂也
從濱中指正南而踰到乎泰里當里小子入山拾薪其山道側
戲遊木刻以爲佛像累石爲塔以戲刻佛而居石寺時々戲遊
白壁天皇之世彼愚夫笑戲刻佛以斧斲破棄之而去之不遠

舉身躄地從口鼻流血而目接如夢忽死涼和護法非無何不
恭敬如法華經說若童子戲木及筆或以指爪甲而畫作佛像
皆成佛道復舉一手小臣願以此供養佛像成無上道是以慎
信矣

◎宮原驛
加茂谷より一里半村南村河川東村を駈けしに新阿蘇
驛あり此地より西四河川をわたりて中阿蘇村に
至る

康正二年造内裏段錢并國役引付云
五貫文 畠山兵部少輔殿 紀列宮原

宮原宗貞故居
一本明惠傳云
元久元年良貞逝去了彼中陰間居住宮原宗貞宅
八條通因連署云

一番 宮原次郎より奉
御奉記云
湖茶屋之跡
治水水堀堀れて
以て流し失

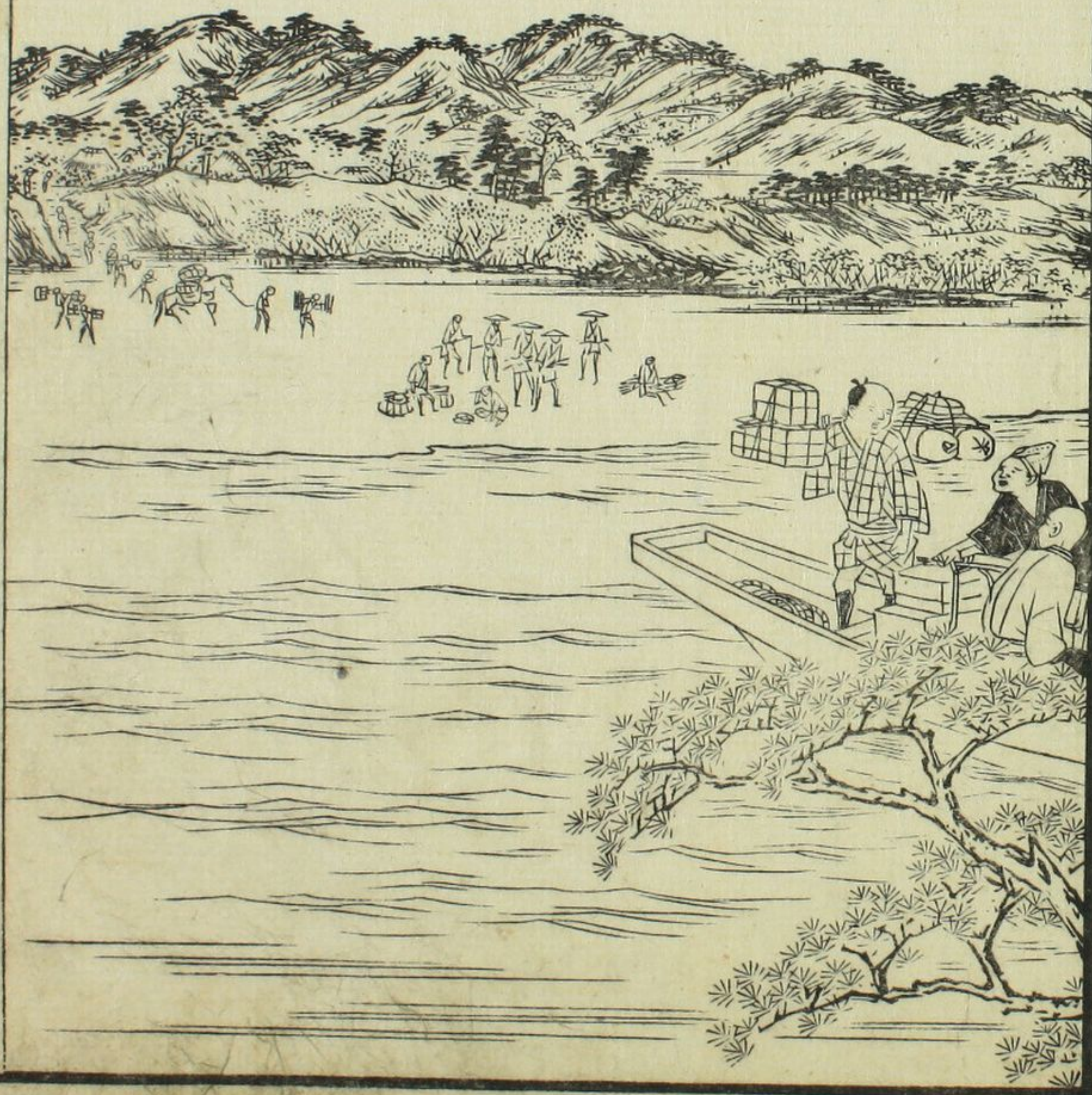
九日天晴朝出立頗遅々 畧次入晝養所過御所 傍書云 宮原

在田川
宮原渡場
の図

黄柳渡頭雲
影寒清流不
速受舟寛香
魚秋老腮如
鐵木葉落時
吹浪團
玉城大夫



西岸霜楓
一葉舟
画圖難寫
滿川秋
急湍飛沫
夜來雨
魚自黃柑
影裏流
小出元明





云
云
入
小
家

南村讀阮

神社 南村渡民ふあり例を月々おねね無事あり傳云々等三
年互田川の階ぬふ上座より粟生村の荷倉の四坐の神社流
末よりふらの地の人傳くきいて四坐ともいへうに又より
をへて天神一社流末よりくば逐には地のちほ社といふより粟生
りる三社を

宮平南村

左田川 宮南村より 新糸衣 中番村へ流る 村あり 田川 湫と 併に 湫
 田石垣 山より 大湫 田系衣 中番村へ流る 村あり 田川 湫と 併に 湫
 湫を 中番村へ流る 田系衣 中番村へ流る 村あり 田川 湫と 併に 湫
 湫を 中番村へ流る 田系衣 中番村へ流る 村あり 田川 湫と 併に 湫

左内川づた

安諦川 安諦川は古名なり丹生の古門ノ元也又星尾林光もに花る弘孝ニ子の父なり
 岩室城 岩室城は古名なり丹生の古門ノ元也又星尾林光もに花る弘孝ニ子の父なり
 形 形は古名なり丹生の古門ノ元也又星尾林光もに花る弘孝ニ子の父なり

小雲殿御子息六人おととも爰りしこめて殊々^{ちやう}み絶

紀四編五十四下

終いねひて末まへの子丹波の侍忠房しんぼうとてまゝい々い々いが淺政あさまさはハ

この戦も落てけ方と云らざりけるが紀伊の怪人湯浅
権守宗重が浮く隠居の入り松尾利ハおふ湯浅村平家

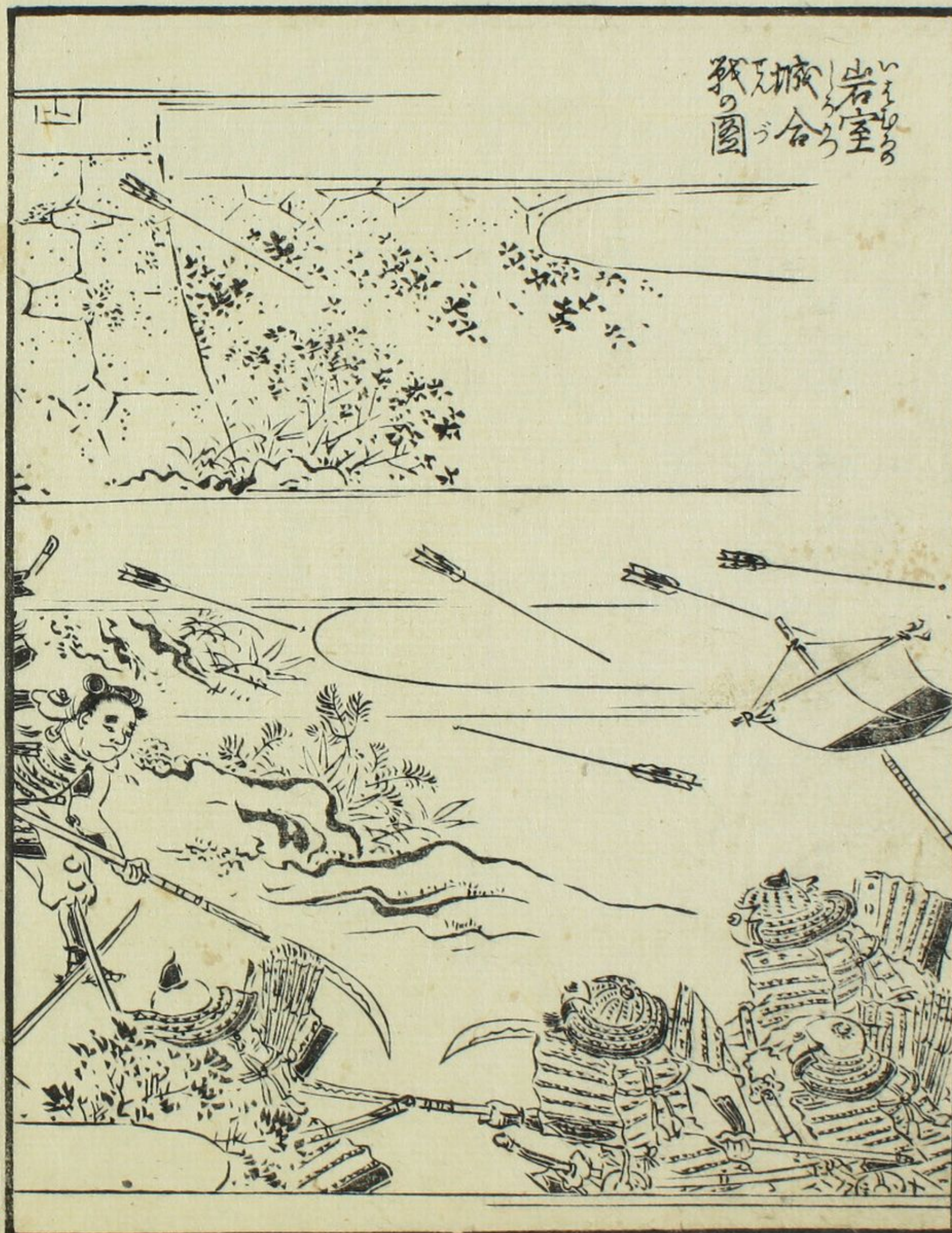
の侍越中の次々兵衛盛次悪七兵衛 常清などもはる
くりたり是を以て和泉紀伊播磨大和河内山城伊賀伊

勢ハケふも隠居する乎かの衆人ども一人二人衆集るは
どふも百姓人よりもより鎌倉殿よりて阿波民部左

成良ふ佐て責らるる朱良紀侯ふみ滅て清不登
今澤かき
 石垣乃
 としふ尔陣を取てひくくはく人態登
 別當塔

増法眼子息湛快父子今仰て責らるる
 の次は湛増父子湯浅は
 と究竟の塙あり園村
 今保なり 岩登
 今保なり 石垣底ふき登
 川とありあり赤根四邊の


文書に見ゆ
 合考ふべし
 岩村の保ル又百餘人擁護する此外湯沙が家の子
 郎等品をくらひ中々え湯沙が甥神壽尾反を
 神壽と
 名草歌



い
 岩
 室
 合
 戦
 の
 図



世に流俗に拘と
 恒本行若者多く
 香特口碑ふつて
 中ふと云ふやうの
 味は味方の文
 みて法力を収
 豪然を偲や
 る世
 幾く
 うのと
 収て
 しく
 い振
 を
 是



後入於塗漆皮筥不安外處置於住室之翼階時々讀之神護
景雲三年歲次己酉夏五月廿三日丁酉午時發火惣家皆悉
燒滅唯彼納經之筥有於盛燭火之中都無所燒損開筥見之
經色儼然文字宛然八方人視聞之無不奇異諒知河東練行
尼所寫如法經之功茲顯陳時王与女讀經免火難之力再示
賛曰貴哉榎本氏深信積功寫一乘經護法神衛火呈靈驗是
不信人改心之能談邪見人輟惡之頑師矣

保田莊

宮前郷の西にありてみヶ村を隔てて保田郷に在りて其の地は古くより
文を以て知らるゝなり其の文を以て知らるゝなり其の地は古くより

古寫照傳記

山田系村に在りて其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

護念山切徳院持名寺

此の寺は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

保田城跡

同村にありて其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

須佐郷

此の郷は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

須佐神社

此の神社は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

本社

此の本社は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

寶藏

此の寶藏は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

伊太祈曾神社遷拜所

此の遷拜所は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

五位上

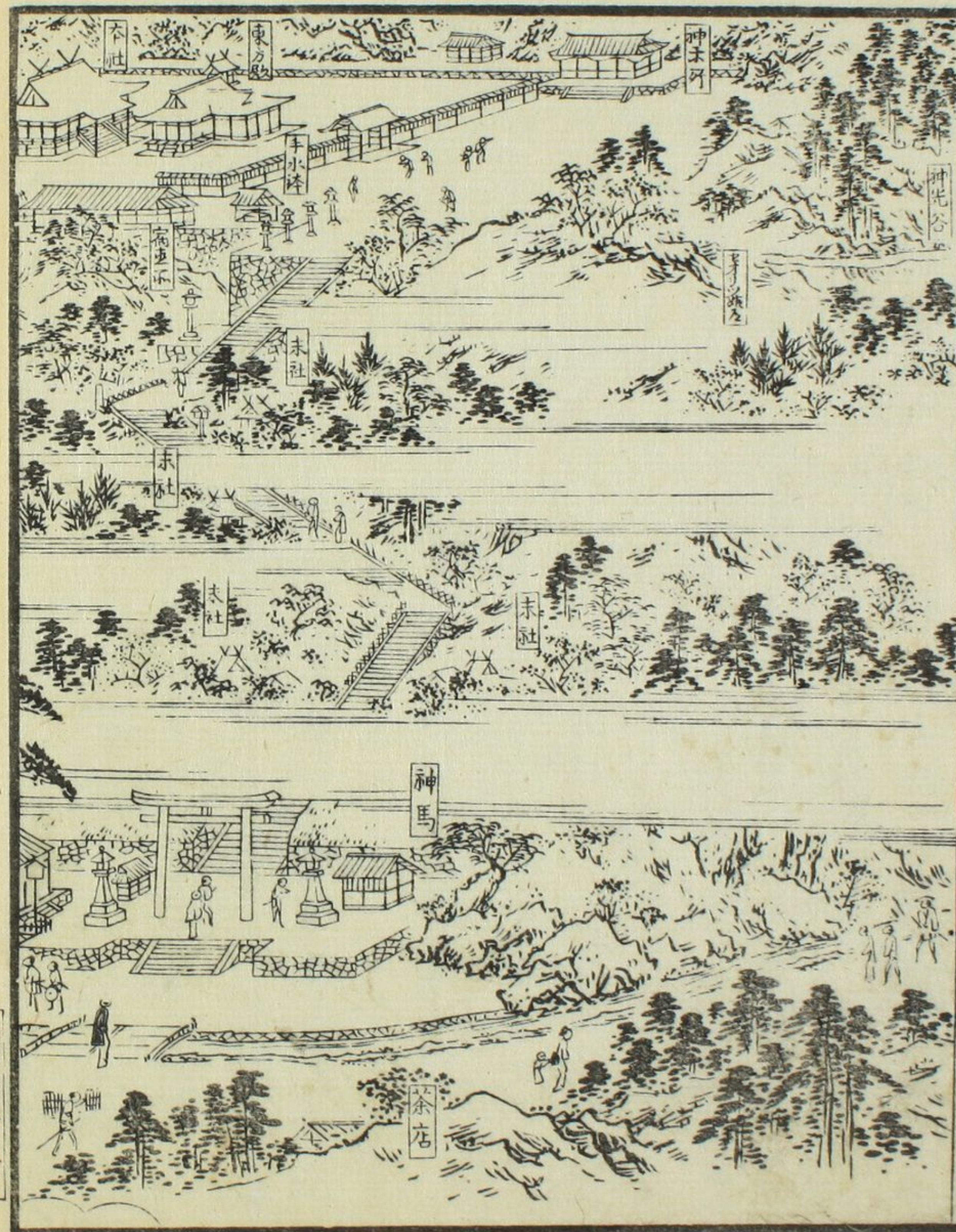
此の五位上は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

紀伊國在田郡須佐神社

此の神社は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより

在田郡從一位須佐大神

此の大神は古くより其の地は古くより其の地は古くより其の地は古くより



卒堵婆前面



嘉禎年中所立木卒都婆朽損之間
今勸進一族以石造立之依此結緣
各預上人之引導可令
成就二世願望者也
康永三年甲九月十九日勸進比

左傍

顏主

勸進比丘
沙彌淨宗
比丘空

星山

この所あり星を盤ひらとてふ處あり星尾を村の名なり
 ちの所あり山頂やまのねあり小瓶こびんを埋うめむ去人運きよとつがと上明恵上人

宮崎莊

保田庄の西の
文が、七ヶ村を
流る

箕島

立川の海に
法と船の高賈群
展に

異事

共事
 船川 葉多部 糸川 九郎 妻
 出産 ね 生兒の 九郎 握りて 形々 び 十 月 日 ありて 形々 角 文
 あみ ち ね 糸 多 部 糸 川 九 郎 妻
 波多氏 収く 又て

紙

あり予ふ況又ね
同村くあり一村の産出神かり
社の小社かり一ふ天文四年おと
のめぐ遊覧

たね辰備ハ北星常寂然と称
少塚と藤原定茲岡雲々今

浄土

日村あり浄土寺大永町中の道場より
おとつふけ物大鼓あり浄土寺大永町の道場より
滅没

北

安富村の西の橋——在田川、海にあり、西端の坡塘と繋
 ぐ、船を入る便と、秋冬の交、氷を融かす、中産物の
 舟、川に架かる、数、方、新、山、嶽、の、く、は、坡、塘、の、後、か、さ、て、又、小
 船、あ、て、せ、ど、り、地、畠、あ、つ、て、江、戸、へ、運、送、は、地
 方、の、方、々、海、に、架、かる、船、村、と、界、を、橋

旅る 服のき

神社 同村あり一村の屋敷にあり 祀神源氏氏
寛文九年の金幣より撰之大形神と彫れり

外

北隣の海濱もあり近きと云ふ
良田と云ふなり海濱あり松村を植
を以て今又其松家の西砂浜や
くかりしを土人呼びて砂浜といふ

淨妙寺

華師堂

○多寶塔

堂○鎮守二社

○什物

兒文珠古画

右洞書院

縁起一巻

當寺々大同元年

立ふとて昇山ハ唐僧如寶和尚といふ七堂伽藍の在りあり

等妙ら以燈焚一藥師堂多宝塔ハ奥院ふて山林茂る

官寄

在田川の長流漾々蕩々として海に於て

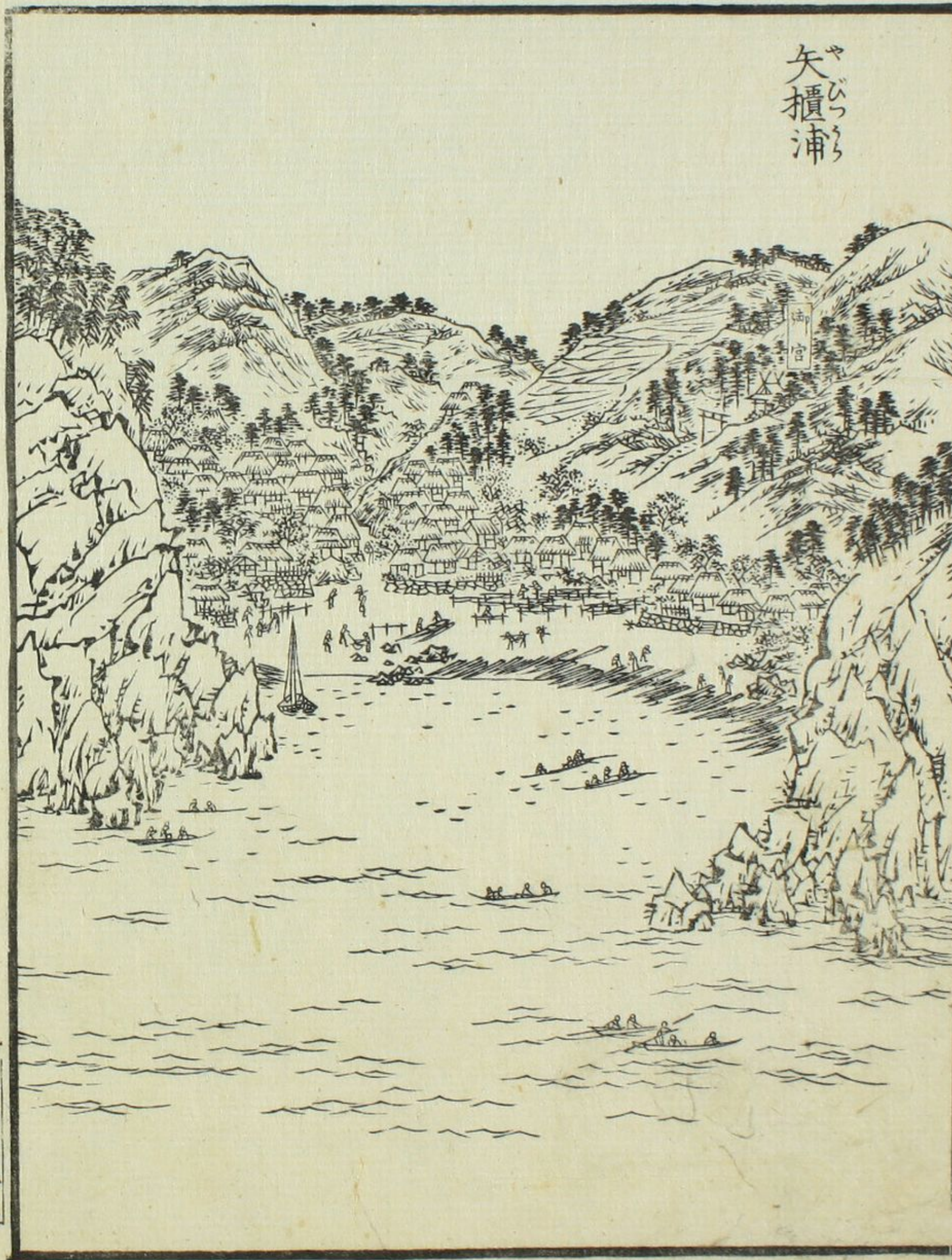
箕首の村舎數百戸ありて川に臨みて建つてあり

北湊と界を隔て南畝を官寄の區域とて龍濱雄

の浦燈の浦等山と云ふ並び列して遠達として西を走りて

長く海中に突出するあり其岬を呼て官寄の岬と云

矢櫃浦



古岸風方歇浦烟
 籠月微遙看一星
 火知是夜漁歸
 上街邦彦



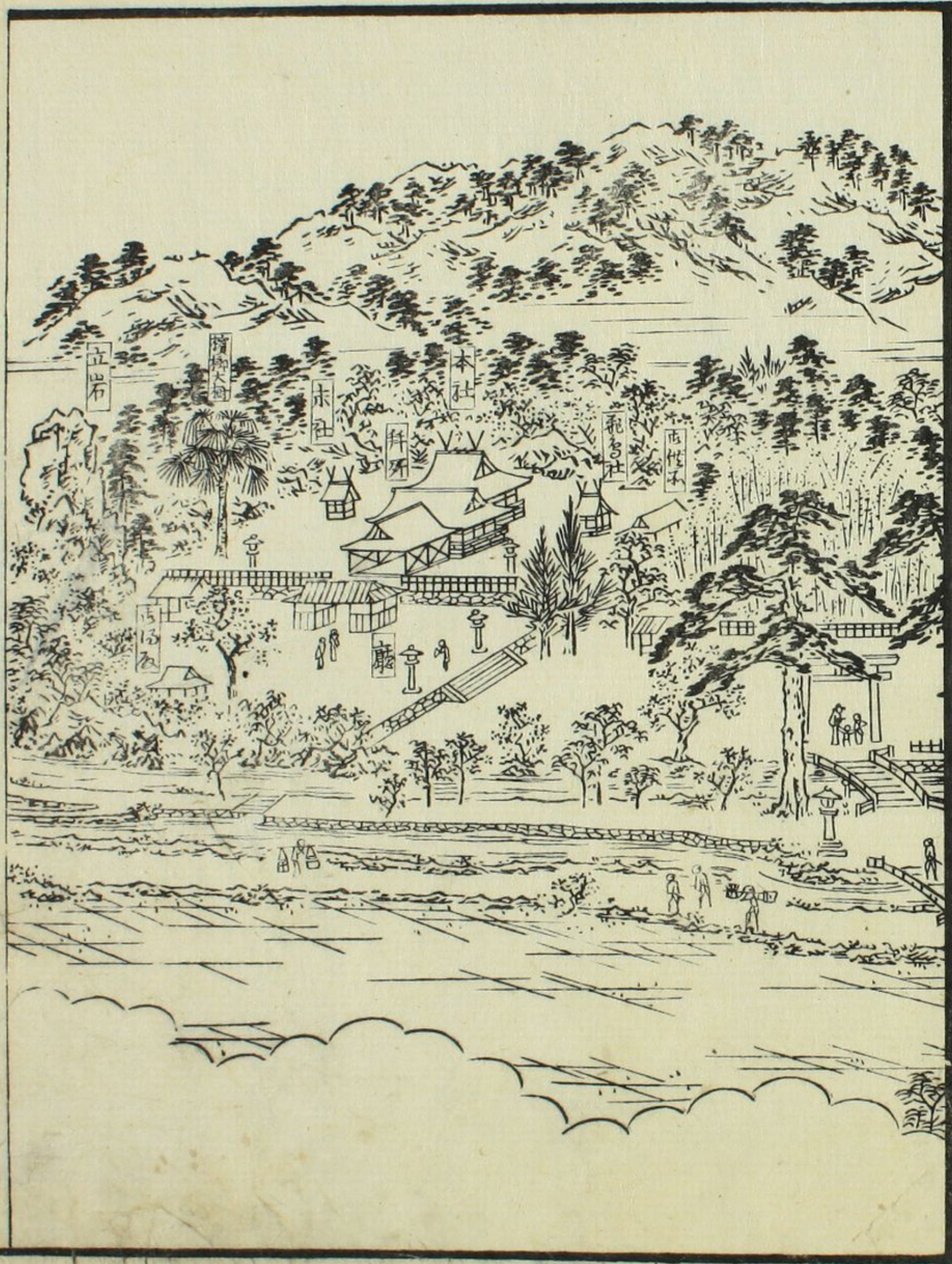
宮崎氏の南に軍記を見んば
入名ふす所なる同太はしりける
名あり此地の人よりいふ
當國金の第九郎尉官記の地を願
孫官侍氏と縁ひといふ
又あると兼久よりぬふ十
ふるふ無遠を中よりまは
智より社ある苗裔と地頭
近境と係と社侍寺を創
孫原をなす孫原をなす
芳氏の裔ふといふ
聖臣氏のとめふ没落
漢は俾ふ傳へ絶る又
紀編二五六

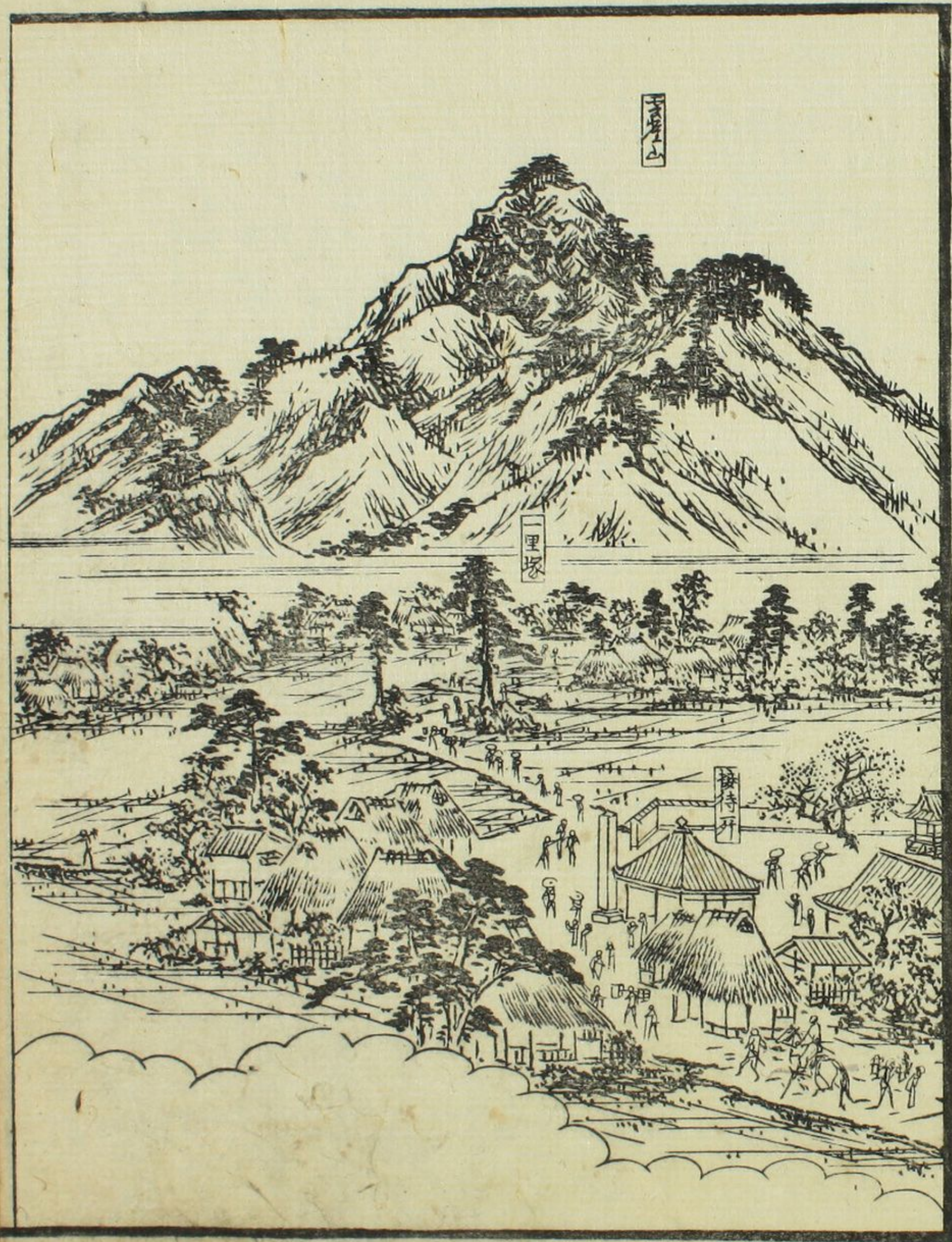
信寺當樂寺なる皆宮侍氏
文書を見んこれハ因ふ
今度於宮崎合戦を
丹生國誌に事なる
事實也然上より
大永二十二月廿日
大永二

坂田彦八郎

立神社 莊中ふ村の産神あり

在四川の流古に星尾村
其の下を流る新堂村
とよひ遠小社号とも
此地は鎮座





得生寺より
線夷峠に至る路程

得生寺ハ中將姓の
家跡ナレバ能登
道者必系我峠ニ至時
夫婦の本像をおし
伝ふもて思縁を
証す又又寺より
ゆるぎなき山を
越えたる三層山
路ハ一里塚ナレバ
法く急の牛車道の
崖形どの急峻多
かれとも高き山あり
をゆくやろし此移あり

此所もあびて古育にむけり武士を養ひて
かりれ然るふ又豊来公の侍も在田所を所
りり姫夫十の来の妻の頃これ侍も来公も申
るが願内ふ山あり南に然を境に北に在る
漢しとあらば伊勢も通其間人改修する
ふいと申りて豊来公彼ふよりやがて燕を
あひたるふこのらに姫君もあつて一
物もよそ中將の内侍もいざらへてあり
の東北に山あり山をとも侍もと鶏山といふ
喜阿婆草菴の産物なりといふふ
に武士ののりなり一
信とも國もあつて中將の侍もあつて
うの元享釋書當麻時の下に僕射藤拱佩
佛尼蓮莖の系もて豊来羅を織る
と成るこれども其ののりなり

○大幡あまは綵画精細なり又奥生々氣あり又播神歌中
將姫の故り波派なるも多し

○稲荷社 日村あり在り
法生久をよそて傳説にかりたり
神田もあつて厳かりし中天王の
はつと神宮も在り後あり
糸我子 所幸にあり今の刻も所幸にあり
糸我山 所幸にあり今の刻も所幸にあり

○白河院 然聖御系後あり忠實北面より
山を越給るふたの傍も葛藤の蔓枝も
とて連て生りて白河殿あり
枝あり進るとは

素
そ
と
ま
ま
の
い
の
ふ
の
松
下
文昭法師

糸我峠
名産の蜜柑を
貯へて盛
暑のころ是と
往來の人々驚
く其氣味佳
妙ふると金
掌玉露ふ
勝るとして他
郷の人々殊更
驚歎す

鉄引抄歌集

歌枕名

まきのささの木のぬさのふた山々いふれりあきなり
推中納言雅長卿

南海集

甲子暮春復浴鉛山絲鹿山中作

祇源瑜

休言嶺外路難通雨洗新林予于紅慣陰肩輿穩如席且吟

且睡亂松中

系我里

夫木抄

八月ある系康の里の月もゆたかなしきあさけ目もはら

仲正

紀伊名所圖會後編卷之二終

